

一不安神経症青年の心理治療過程と治療的人格変化

田 畑 治

I 問題と目的

具体的不安という人間が生きていく上での中心課題として、古くから文学、哲学をはじめ、心理学、社会学、文化人類学等の諸領域で扱われてきた。May, R. (1950)は、その大著「不安の意味」(邦訳では「不安の人間学」)において、不安の現代的解釈を行なっている。

現代は果していかなる時代であるのだろうか。人は“不安の時代”“混沌の時代”はたまた“無気力の時代”と呼び方は、さまざまである。

筆者は、将来をになうべき青年期にある学生たちと付き合う場に職を奉じている。そこでは、教職以外に学生の相談という専門的な職務にも同時に従事してきている。すなわちカウンセリングや心理療法という治療実践状況で、上述のような“具体的不安”に苦痛や訴えを起して来談する学生に出くわすことが、ままあるのである。そのような状況で、一定の時間、継続的に援助的に接することが要請されるし、かつまたこちらの側でも当の本人の生きるうえでの具体的不安を通じて、ともに感じ合うという体験をすることも余儀なくされる。つまりそこでは、来談した学生が、自ら情緒的により安定していきながら、自己を再統合したり再確立し、かつまた強く生き抜いていくことができるように、援助者とともに努力していくよう目指すのである。

本研究は、かかる具体的不安に悩む一青年の、足かけ5ケ年にわたる長期のカウンセラー(筆者)との、苦悩をともに感じ合った治療実践のまとめである。この一青年との長期にわたる心理治療過程で、さまざまな課題に出くわした。そのいくつかを列記すれば、この一青年の不安を根源的に引き起し、かつながらえさせた状況の問題、彼が不安に悩まされながら直面した大学という社会—学業、交友関係、就職などを通じて感じる大学という社会状況—、さらにこのような苦痛に悩む青年を援助しようとするカウンセラーの側の問題、医師との連けいの問題など実に多方面にわたる内容が含まれている。カウンセラーとしての筆者は、これらの諸問題を明確化することによって、援助的態度・条件、さらには今後出くわすであろう第2、第3の不安に悩む青年たちとのカウンセリングを、より効果的になしうるよう、ここにその総

括的なまとめを試みようとしたのである。これが筆者の問題意識の中心である。これらを明確化するなかで、自己のカウンセラーとしての可能性と限界をも明らかにしたいと考える。

したがって、本研究の目的は、治療的人格変化が、カウンセラー(筆者)とクライアント(不安神経症に悩む青年)との援助的人間関係(=治療関係とよぶ)を通じて、どのように起っていくか、その全面接過程の記録と5回毎に把えた質問紙とによって、両面から分析検討し、本事例の治療過程と治療による人格変容を総合的に考察することである。

II 方法

1 事例A.T. 1970年10月23日受理。受理当時、19歳で大学2年在学中の男子。本事例は、1970年11月6日に初回面接を行ない、1974年2月19日に81回目の面接をもって、再び来談することなく大学を卒業し、カウンセリングを“中断”したものである。現在、地方公務員。

a : 主訴：備えつけの申し込み用紙に「精神衛生、人間関係」とのみ記入して、学生部より紹介されてくる。

相談事項：簡単な面接を行なった結果、以下のような事実が判明した。「最近10月はじめ頃、急に不安に襲われる。人が死んだとき(たとえば新聞の訃報欄を見たとき)、自分も死ぬのではないかと不安になる。夜、ぐっすり眠れない。冷汗をかいて、眠れなくなったりする。今春5月にも同じような状態になって、U先生(学生相談担当)に相談し、7月に大学病院の内科に行ってきたら、X線や心電図は異常なしといわれた。U先生とは、その間、3~4回会ってもらった。(相談のきっかけはあったか?)いつも自分は健康が勝れない。夏負けしたりする。(記入している事項「人間関係」ということは?)自分は内気なたちである。クラスの間関係くらいであるが、それほど親しい友達はいない。(いまの気持は?)くたびれた感じで、勉学に身が入らない。授業に身が入らないし、授業を聞きたくない。授業が早く終わらないかなあと思うことがある。(人が怖い—対人恐怖は?)他人が自分を馬鹿にしているな、と感じる。視線が怖いということはない。(以前の、中・高校時代にこんなことはなかったか?)高校時代には、不安はないこ

とはなかった。別に気にならなかった。大学には現役で入学した。(将来はどうしようと思っている?)大学院に進みたいと思う。企業には向くと思う。ふつうのサラリーマンとしてならやれるけれど。人と付き合うのは不向きである。」などが表現された。

b. 家族構成と家族歴: 両親, 妹2人(中2, 小4)の5人家族。父親は, 公務員(郵便局員)。家族は一応健全ということである。本人は母方の系統の“初孫”。

c. 心理検査: 客観的資料を得るために, TPI総合性格検査を実施。(この検査は, 筆者が鑑別診断を行なう際に, 常用し, その結果をうけて, 精神科医の受診をさせるかどうかを判断するために, “妥当性”が高いと考えてきている。)

先の簡単な面接のあとで実施した結果は, 下図1のとおりである。その結果, 有効性尺度のなかの無応答項目

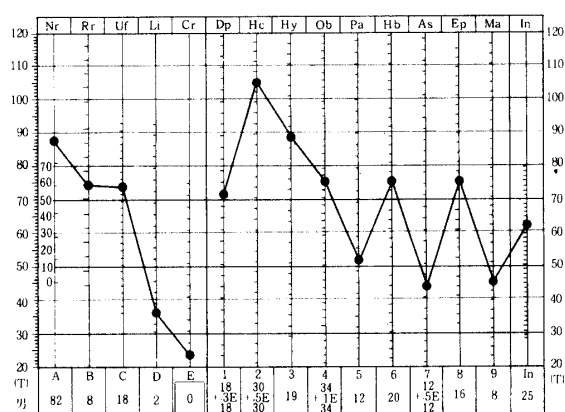


Fig 1 TPI Profile of Client A.T.

は, 82項目(全項目の6分の1)もあった。本人は「判断がつかねるものもある」といい, 検査後, 疲れを訴えていた。

受理面接と心理検査時の印象: 頭髪は手入れをしないボサボサの状態で, 心理的不安定状態を伺わせる。歯並びもよくなく, 赤ら顔で, その内的不安状態を感じさせる様子がみなぎっている。面接中も, 自発性が乏しく, 気力が乏しい感じ。単調な表情で, やや硬い。低い声で話し, 精神的エネルギーの低さも伺わせた。

d. 診断仮説: 面接時の印象とTPI性格検査の結果を総合して, 「心気症」を考えた。しかし, 不明確な点もあり, 今後の処置等も含め, 精神科医の診断を乞う方が, 当方にも安心できるので, M医師(学生相談も担当)に, 心理検査の所見を付けて紹介した。

3日後に, M医師から「不安神経症」との診断結果が電話で報告されてくる。そこで同時に, 本人の郷里に連絡をとるよう指示をうける。その内容は, ①母親に, 本

人の現在の状態を伝え, 医師の診察を受けたこと, ②M医師の意向として, 夜分に父親から本人に電話を入れること, などであった。

e. 処遇: 当方としては, 本人の修学上の問題をきっかけとした, さまざまの適応上の問題をともに考えていく上で, 継続的なカウンセリングを考えた。

2. 本研究における分析資料 ① 面接記録の概要: 面接カルテの記載内容をレジメにしたものと印象の記録。② 主要と思われる回の面接逐語記録。③ 『心理治療関係の体験目録』—筆者が作成したもので, カウンセラー用, クライアント用がある。両用とも, 5段階(-2~+2)の自己評定による質問紙で, それぞれ120項目から成り立っている。本研究では, 初回, 5回, 10回, 15回, 20回, 30回, 36回, 40回, 45回, 50回, 60回, 70回, 76回, および81回(最終回)時に実施した。なお本質問紙については, 田畑(1967, 1968)にその作成手続き等が述べられている。④ フォロー・アップ調査: 自由記述法による質問紙で, 本人用を用いた。I~V問。面接中断後, 約8カ月目に郵送形式で実施した。⑤ 「変化認知の評定尺度」: 治療的人格変化の成果の測定のために用いた。これは, クライアントの原因・症状, 行動の理解, 生き方, 重要さといった4局面について, それぞれ5点法で評定し, 総計20点満点である。クライアント用は, ④とあわせて郵送形式で実施した。

3. 面接場所と日時: 大学の筆者の研究室。面接室として専用のものがない状況なので, 研究室には来談するクライアントの他に, 卒業論文指導その他の学生が出入りする場所。面接中は, 一応その旨の札を掲げておくが, 本クライアントの場合, そのような遮断をして他学生の出入りを防いだが, どうしてもトラブルが起りがちなときもあった。たとえばクライアントが早目に入室し, カウンセラーが一寸席はずしていた際に, 他学生も入室し, お互いにまじまじしたり, クライアントがその学生(たち)の態度に腹を立てていたりすることもあった。

4. カウンセラー: 筆者。カウンセリングのフィロソフィー(考え方)としては, 基本的にクライアント中心療法に依拠しているし, そのための努力をしてきていると自分で思っている。カウンセリング経験は, 年数でいうと9年半(本ケース担当当時)である。

III 結 果

1 面接記録に基づく心理治療過程

1.1. 初回面接に至るまでの経過: 本人が病院の精神

科医の受診をしたあと、3日後にM医師から、父兄への連絡を指示し、カウンセラーは本人の郷里に電話で連絡をした。父親が不在なので、母親に①本人の現在の状態とM医師の意向を伝える。その内容は、夜分に父親から本人に電話を入れるということであった。

2日後(10月28日)に父親から研究室に電話連絡があり、①大学病院では、M医師からN医師にひきついで診てもらい、2カ月くらい通院治療を受ける必要があること、②父親としては、一週間に一度くらい、息子(本人)の下宿まで来てみようと思うこと、などを伝達してくる。

当方としても、併行して修学上の問題をはじめとした適応上の諸問題の解決に援助するよう、本人の意向も確かめ、週一回の定期的なカウンセリングを開始することとした。一回の面接時間は、原則として45分であった。

1.2 初回面接(1970年11月6日): T. カウンセラー, C. クライアント。(T, Cのあとの数字は発言番号)

T1 そいじゃいま丁度5時ですね(エエ)45分時間おとりますから《間》どうぞどういってからでもお話ください。

C1 そうですね。まあ一応あの病院いって貰いいただいて(ホウ)一応不安感というのは、まあ何かおさまってきたことはおさまった(ホウ、よかったね)いま何か心理検査をうけているんです。

T2 ウム、検査を。たとえばどんな感じの検査ですか?

C2 テーラーとか、ロールシャッハです。(ウム、ウム、エー)

T3 そのお医者さんの指図でうけているわけね(ハイ)ウム、できた感じ?

C3 そうですね、何か、一寸、検査、まあその何ていいますか(ウム)非常に疲れるといえますか(ウム)疲れちゃう、ウムウムウム)検査受けるときも、まあからドキドキしていました。

T4 ドキドキしちゃう。何かどうしようかなーっていう気持ちになっちゃうわけ?(ハイ)でそういう意味では、あなたとしてはまだこうほんとうの、いつもいままでの自分だっている感じではないのね。……何か一寸そういうことであると、こう心臓ドキドキするっていう感じあるということ。

C4 エー。(ウム、ウム)

T5 でも不安感は、こうずい分ましになった(えー)過ごしやすい感じね(エエ)ウム、ウム。

C5 それからまた勉強のときも、一寸ドキドキする、というよりも何か(ハイ)その胸のあたりが何かむずがゆくなる、そういうふうな感じですか。

T6 感じがあった(あります)いま(ハイ)ウム、ウムむずむずするって、ウム、でそのことは、あなたにとって、こうまだ調子がよくないってそういう感じなんですか

C6 ハイ、そうですね(ウムウム)まあ、大体そういう感じがするのは(ウム)まあ、一応、あの自分にとってわからないことがあった場合に、やっぱりそうなる

T7 ウムウム、わからないときがあったときにね(ハイ)何か、ドキキとする感じなんだね。

C7 ええ、というより、胸のあたりがむずがゆくなってきて、何かドキドキしてくるんです。

T8 ウーム、ウム、あのそれは例えば語学とか、一般講義とかにか

かわらず(ハイ)例えば講義なんかきいていて、こうわからないとき、何かこの辺、むずがゆくなっちゃうわけね(ハイ)

C8 何か、人と話しあいていて(ハイ、ウム)目が合いますとね、(ホウ)その目から自分の目を、そらせなくなるようなことが多いです。

T9 あー、いままでは、それ話、そらしちゃっていたわけ?

C9 わけで、目と目が会うと、相手の目を、そのずうっとみつめたまま、目がそらせないわけです。

T10 はー、そらせなくなっちゃうということ。何か目と目が会うと、何か、何ていうかなー、バツがわるい、そんな感じになる。(そうです)けれども目は離せられなくなるのね。

C10 えーと、無理して離そうと思えば、離せられるけれども。目を離そうとするとき、その確か、相手のそのなんていいますか、気を害するのではないかという(ウムウム)

T11 だから無理にこうはずしたりしていないわけね(無理にっていますと?)無理にはなしちゃうと相手にこう悪い感じを与えるのじゃないかって

C11 そうですね(ウムウム)

T12 であなたとしてみたら、何ていうかなー、一生懸命こう目を合わせているという感じなんですか

C12 いえ、そうでもないんです(ウム)

T13 ウーム、別に自分が何ていうか。その心の底をこのぞかかっているというそんな感じでもない?

C13 そうではなくて、その相手とこう話していると、その相手と話していると、相手とこう話していることがおっくうになるんです(アソウ、ウムウム)その場合、相手の目をみていないと、自分がその人との話を欲していないのではないかと、その人に思われるんじゃないかということです(アソウカ)

T14 ハイ、あなたとしては、少なくとも目を、少なくとも目だけは合わせておきたい(そうです)そういう気持ですね。でも、もっと底の気持としては、あまりこう話さくということば《おっくうではない?》

C14 要するに、人の話を、人と話をしたいと思うようなこともありますがけれども、(ウムウム)ときによっては、人と話すのも、非常にこうイヤ(何か)

T15 (イヤ)時には、こう黙って自分一人でいたいっていう、そういう気持もあるわけね(そうです)ハイ。でも、こう自分の気持、他の人にこうきいてほしい、話したい、そういう気持のときもこうあるわけね(ハイ)ウム、いつも自分ひとりであるだけでなくね(ハイ)ウム

C15 《間15'》だから人と話をする場合に、その何か人の話を、自分からした場合にですね(ええ)その話が途中で跡切れてしまうわけです(アソウ)自分が何かいまして、相手の人が何か答えますと(ウムウム)その次に僕がいう番になると、(ウムウム)僕が何にも言えなくなってしまう、そういうことがある。

T16 何かこう強いられるっていうか、そういう感じなんですか。話題が跡切れたりすると、気持ちが落ちつかなくなっちゃうってこと。

C16 まあそうですね(ハイ、ウムウム)それはもちろん、話したい場合なんですけれども、(ハイ)話題が自分でみつからない場合にです(ナルホド)

T17 なかなかこう色々感じていても、それがこうことばに表現でき

ない(ハイ)そういうことね、腹の底で感じていても、(ハイ)ウム。

C17 《やや間》だから、昔は、いまはそれほどでもないのですけれども、(ウム)昔は何ていうんですか、例えば、特に女の人に対してもすぐに顔が赤くなりほしくないかとか(アー、ハイ)それから態度がすぐにどぎまぎするのではないかと、そういうこと非常に気にしていたようです(ウム、ハイ)

T18 以前はね

C18 あー、以前、以前はというより、いまでも多少あります

T19 あーそう、つまり女性に対しても、こう何ていうか、おどおどしちゃうというか、そんな感じ(ハイ)そのことは、男子に対するときよりも、こうひどい感じなんですね(えー)ウム、ウム

C19 それで、まあ、何か、いつも他人に対して、自分が何かあまり良い印象を与えていないのではないかと、そういう不安が常にある(ウムハイ)それは、特に男子に対してよりも、女性に対して強いように思うんです。

T20 ハイ、ナルホド。そういう女性に対する悪い印象というかね、与えている自分というの、いまあなたは感じているのね(ハイ)

C20 それで、その相手から、軽蔑されているんじゃないかという不安も、男子からよりも、女子からの方が(アースウ)強い。

T21 たとえば人に馬鹿にされているという感じというのね(えー)そういう感じなのね(そうです)ウム、ウム、廊下で会って、知らんふりをして行かれると、そういうことも感じますね

C21 えー感じます(ウム、ウム)

《以上面接冒頭より8分》

このあと、自分の場合、女性に対してバツが悪いのは中学、高校以来であることを述べ、自分の場合、他人から、両親をも含めて、“賞められた”経験がないと述べる。大学に入って、学業に関しててもそうである。

C67 それにあの何ていいますか、一年のときが、何かそういった、あれもしなきゃいけない、これもしなきゃいけないという気分であの大学に入ってから、これまでずうっとしてきたものですから、何かその分が非常に時間の浪費だということ、悔みになって

T68 あーそう、後悔の感じね(ハイ)ウム、つまり自分が入って、ここまで来るあいだに、何か出来ると思っていたのが、(ハイ)今日まであまり出来ていないみたい《T、クシャミ》(ハイ)

C68 それで何か後悔といっしょに、焦りというものがある

T69 ウムウム、えー、ウム、何かいつもこう気持の面では焦っていたけども、実際はあまりどれも一つってない、そういう後悔の念ね(ハイ)

C69 それに高校時代は、まあ一応、例えばカリキュラムにしても、(ウム)一応定まったカリキュラム通りにやっておればよかったのですけれども(ハイ)大学になりますと(ハイ)自分で選択しなければならぬ(エエ)だから自分のなした選択が、果して自分に対してよかったのか、どうかということに関すると、自信がもてないという……

T70 ハイ、誰も励ましたり、認めてもらえないでね。

C70 ハイ(ウム)

T71 つまり、これで自分、いいかしらっていう気持ちになってしまう(ハイ)まあ、それだけに、高校時代の生活、高校までの生活とね(ハイ)現在の、ほんとうに自分次第というのと、ちがうわけよね(ハイ)何かあまりにそれが大きいために、自分には戸惑いがあるみたい(ハイ)どれから手をつけたらよいかね(ハイ)ウム。

C71 高校時代は、一応、何か定まった日課というものがあって、一応日課どおりに生活していたのですけれども。

T72 ウムウム、与えられたものをやればよかったわけね

C72 ハイ、大学では、自分からとって行かなければならない。(ウムウム)

T73 つまり、自分で今度はあの、与えていかなければならないわけですよ(ハイ)そういうところにあなたの場合は、こう、何ていうか、非常にギャップを感じちゃった(ハイ)ウム《間25》何か自分でその与えていく、つまり自分で見つけていくということが、いまあなたにとっては、とっておくことなんですね。

C73 えー、まあそうです(ウムウム)

T74 でも、つらいけれども、そのことに耐えていかなければいけない面もある、そういう感じする?

C74 そうだと思います(ウム)

T75 苦しいけれどね(ええ)ウム —— 《沈黙4'00"》 —— 授業には、一応、こう登録しているとおりを、大体出てきておられるわけね。

C75 いえー、まあ、一応登録しているあるうちから(ウム)

T76 全部じゃないわけ

C76 全部じゃない(ウムウム)一応、今後の予定としては、一部を切り捨てていく予定(アースウ)必要な単位だけ取って、あとは適当に。《低い声で》

T77 何か自分の感じ、いままであまり多く手を出しすぎていた(ハイ)そんな感じなのね(ハイ)重点的にやりたい。

C77 重点的にやらざるを得ない《力なく》

T78 フムフム。いまの気持ちからしても(ハイ)すべてに、こう手を出すわけにいかないわけね、(ハイ)ウム《C。フーという音》深呼吸しているね(えー)疲れちゃった?

C78 えー(ウム)

T79 まあ、時間もほぼ来ましたね(ハイ)あの一、大体、一回このぐらい、45分でやりますからね(ハイ)それでいいですね(ハイ)。じゃ今日は、これまでにしましょう。《以上面接後半部約10分》

＜初回面接時の印象＞ 受面接時より、よく話すようになった。しかし感情のこもった活気のある自発的発言は乏しく、窓外を落ちつかずに注目したりする。注1)「緊張する」という。

注1) このクライアントが、初回面接時においてみせた窓外をうつろな目つきでながめることは、決して目を相手からそむけるだけでなく、そのことは、クライアント自身も気づいていない“無意識的な注視”であることが、第75回面接時になってようやくはっきりとしてきた。カウンセラーも気づかなかった。

1. 3.<2回目面接(11月13日)から9回目面接(1971年1月29日)までの経過の概要>《頭部の番号は面接回数》

2:病院のY医師に「他人とのあいだにカベを作っている。自分で変えようと思えば変えられる」などといわれ、自分はそれがあたっているように思う。「目標とのあいだに大きなズレがあり、不安をもっている。不安は生きといることの証拠だ」ともいわれた。女性のこと、劣等感のことにもふれた。自分の目標は、大学院で、女性には無関心でありたい。友人ともあまりかかわらないが、自分は優越感を感じている。

3:大学院に関する話題。自分の中学時代からの能力や技能は、知能が高いことを除けば、自信がない。高校は二流校を選んだ。父親は、旧制の一流校。自分は一流校に入るのに、5分5分だったので、安全な道を選んだ。いまは一流校への反撥もある。母方のイトコとライバルな者がいる。イトコは2浪して私大一流校へ入学、自分は現役で二流校へ入学したが、すっきりわりきれない。

4:不安はだんだん弱まってきた。医者は、不安が人間の宿命というがすっきりしない。三島由起夫の割腹自殺の事件があり、ドキッとした。新聞の訃報欄をよくみたりして、自分には死の不安がある。心臓病で死ぬ場合が多く、自分の場合も、心臓が痛み、本を読んでもドキドキしたりする。妹との張り合いをする。

5:夢をみる。「水泳をしていて、次第に底なしの方にはまっていく感じ」(夢①) 医者とここ(相談室)とで負担を感じる。冬で寒くなり、帰りがけにうす暗くなり、不安になる。夜でも、うす明りがないと眠れない。医者からもらう薬がふえるのではないかと不安である。同級生と水をあけられたみたい。自分は最近高校のガリ勉の延長をやっているみたいでイヤでたまらない。

6:自分は日に歯を5回磨いている。歯槽膿ろうで歯ならびも良くない。前回話した夢(夢①)に出てくる溺死した友人に、自分は劣等感コンプレックスを感じていたと思う。その友人は、自分にはないものをもっていたので、父親からその友人の死をきいて、ショックだった。その友人は才能のある人だった(自分は才能や技能に自信がない)。自分は、これまで恵まれてきた、自分はこれまで自分のことばかりにとらわれてきた。またいままでも女性やセックスの妄想にとらわれてきた。いま心配というのは、父と年が離れていて、将来妹(10歳年下)のめんどうをみていかなければいけないと思うことである。

7:(記録欠)

8:《新年最初の面接》近頃、過ごしやすくなった。医療の方は、終りに近い由。ただ自分としては、しばらく続けた方がよいと思う。帰省中、ほとんど自宅外には出なかった。近所付き合いは、先祖代々からあって、田

舎では避けられない。自分の先祖の兄弟に、放蕩で身をつぶしたために、早死したものがいる。自分にも、その先天的素質があるのではないかと不安である。自分は完全癖が強いと思う。学年末試験が近づき、何かと迷う。奨学金問題もあり、数科目のみの受験をするというわけにいかず、学期末試験を思うとイライラする。

9:いよいよ学期末試験が来週からはじまり、人に話しかけられたりすると、イライラする。安心して勉強してられない。この試験の負担が、身体的不安になって出てくる。心臓なんか、また悪いと感じるのではないか。

面接印象:これまでの学校時代の対人関係を話題としながら、自己の自信欠如、隔絶感、優越感と劣等感に悩んでいることがよく伝わってくる。自分でも馬鹿らしいと感じる面と照れくさいと感じる両面を秘めている。特に交友関係では、今日までの自分を、いわば屈辱感のかたまりと感じ、競争心、期待過剰に走ってしまっているところが伺える。

時期が冬期にかかり、クライアントは自らの暗闇恐怖を表明する。自発的に表明するが、どの言葉にも張りがなく、力が込められない。ここ一年間を無為にすごしてきたこと、それだけに学期末試験が近づくにつれて、また身体不安も表明するようになる。面接時間を、午後一時からに変更すると、これによりクライアントは'真昼間'の状況で、自己の内界にも明るい光をさし出しはじめるのを感じるようになる。本人の内界にも、やや夜明け方の世界が、現実の実感される世界にもあらわれ出したという印象である。テスト不安は、きわめて高い印象。

1. 4.<10回目面接(2月5日)から12回目面接(2月26日)までの経過の概要> 10:《10分遅刻して来室》必須の授業がつい先までであった。自分は、よくわからないままに授業に出ていた。いままだ"偏頭痛"がして、気持がわるい。いま特に疲れている。下宿でも最近よく寝すぎる。一日に8~11時間寝ている。こういうぶざまな状態では、将来が果してどうなるか、心配である。いま大学院進学一本でいくのも自信がなくなり、他学科へ転科したい気持である。自分は自分を束縛して、かえってきゅうくつな感じであるが、どうしょうもない。

11:自分はどうもいつも不安や心配ばかりである。今までもそうだが、絶えず成績のことで、生活を切りつめてきたみたい。自分は浪人の経験がないので、絶えず失敗しないよう失敗しないようと思っているようだ。時間が無為のうちに過ぎていくことが恐ろしい。気持が張りつめた面でのプラスは確かにあった。

12:この頃、何もする気がしない。勉強していても、満腹の感じで落ちつかない。自分の所属学科以外のことがよくみえて仕方がない。"春眠暁を覚えず"で、一日

中気持がもうろうとしている。時間だけが、無為にすぎ
ていく感じで、早く新学期が来ないかなーと思う。病院
のY医師のところには、2週間に一回通院している。病
院では、新学期から「精神分析」を受けることになって
いる。それもしょうがない。自分としては、春休みで今
日か、明日にも帰省する予定。

面接印象：これまで一貫して、自分は知能が高いとい
う自己像をもちながら、現実には直面する学業や友人関係
では、能力や技能を発揮できず、身体的疲労や焦燥感に
悩まされている。修学に際して、特に授業や学年末試験
では、テスト不安が高まり、無気力感や頭痛にあらわれ
てくる。将来への確信も持たず、勉学意欲は次第に遠の
いていってしまい、転学科のことも考えてみる。いまが
“どん底”というカウンセラーのクライアント状況の受
けとめである。

時間だけが、無為徒労のうちに過ぎてしまい、いまま
で失敗したことの無いというもう一つの完全癖にも近い
自己像に、傷がつくこと、破綻をきたすことを恐れ、そ
こから逃げ出したいとも感じている。イライラした様子
は面接中にも表出され、落ちつかない。

春休み前の最終面接でも、これまでのどの回よりも低
い、元気のない声調で話す。徒労感、試験が終了したこ
とからくる空白感、将来に対する得体の知れない不安に
悩まされている。カウンセラーには、いま一つの節目と
してやま場（クライアントには「谷底」）に差ししかっ
ているという印象。クライアントは、面接中に冥目した
ままで発言していったのが、印象的であった。

1.5.<13回目面接（4月9日）から20回目面接（5月
28日）までの経過の概要> 13：《3年次第一回目の面
接》春休みは何もしないまま終わったみたい。郷里で勉強し
たような気がしない。自分は“強迫神経症”になったみた
いだ。自分の場合、もう一つの大きな問題は、対人関係の
悪さがあり、特に‘女性’との関係が悪い。女性をみると、
何か自分が馬鹿にされているみたい。春休み中、自分
の精神分析を行なってみると、小学校時代の同級の女
の子、大学に入ってから女子学生に馬鹿にされているみた
い。

14：2年次の成績票をもらったが、自信のあったある
科目が‘可’であり、ガックリきた。友達の中には授業
にあまり出ないで‘良’をとったのがいる。新学期の専
門の演習なんか予習する気がしない。大学がおもしろく
ないのは、前回話した女性問題と関係があると思う。いま
は無性に疲れる。春先はいつもそうだが、いま最低の
気分。胃腸の調子がおかしい。

15：相談来室前に、所属学部の指導教官に呼ばれて、
成績のことで説教され、「学問をやるのには謙虚でなけ

ればならない」といわれた。大学院志望は、ダメだと言
われた。ショックだった。

16：クラス・メートがみな賢くみえる。3年になると
みんな急に勉強しだし、気分的に圧迫され、イライラす
る。先生に忠告されたが、勉強やる気が起らない。自分
は○学を、両親の意向や期待で選んだが、それは就職が
有利だという理由で選んだみたい。自分は、歴史や文学
の方に興味がある。○学のクラスの雰囲気は、就職の予
備校みたいで、ガリ勉に没頭してイヤだ。春は眠い。

17：クラスの雰囲気のことを考えてみた。みんなバラ
バラで、自分ひとりが取り残されたみたい。5月連休に
帰省したが、どうということなかった。下宿にいても落
ちつかない。

18：4年生が、就職の話をしている。今年は不景気を
反映して、来年も競争率が高くなり、心痛である。自分
は企業には向かない。公務員関係をあれこれ受けたい。
でも○○の勉強に、ピッタリとする感じがしない。勉強に
身が入らない。落ちつかない気持だけが、不安で重苦し
い。《しばらく沈黙のあと》今日は疲れたので、面接は
これくらいにしたい。週末になると、疲れる。

19：自分の疾病をめぐるの主な話題——勉強はノイ
ローゼを悪化させるのだろうか。ノイローゼは、大体何
カ月くらいかかるのだろうか。自分としては、前よりは
ましになってきた感じはあるが、自信がもてない。“デ
ッド・ロック”（暗礁）に乗り上げた感じ。薬の副作用
が心配。学校には惰性できているみたい。ノイローゼは
素質的な面があると思う。大学ではノイローゼは許され
るが、社会では一生つきまとう。自分は楽天的に生きら
れない。遊べない自分をみると、嫌である。話すときで
も、口下手でしゃちこぼり、こわばってしまう。いま自
分はカゼ気味。土曜日になると解放感を感じ、すぐカゼ
をひく。

20：明日、一科目専門の試験がある。‘可’をとった
ことがあり、不安である。無理矢理に○○の勉強してい
る。勉強しすぎて、身体をこわしはしないか、不安であ
る。

面接印象：春休みを終え、いよいよ専門コースに入っ
る。春休み前に感じていたテスト不安は低くなり、表情
もややすぐれてきた。語調もましになってきている。し
かし、女性、特に小学時代のクラスの女生徒、大学の女
子学生に対する“心のシコリ”が浮かび上ってきた。

修学面では、同級生との間にミズを感じ、努力した科
目の成績が報いられず、自信喪失してしまう。特に、専
門の指導教官の厳しい忠告にショックを受け、意気消沈
している。カウンセラーは、そのようなクライアントを
みると、心底からいつになったらクライアントが蛮勇を

ふるって立ち向っていけるようになるのか、ただ一緒にそのチャンスを探ることを願うのみである。

来室時に、いつも廊下を、“足をひきずるような靴音”をたてている。このところ特にその印象が深い。そして、その赤ら顔、緊張感、疲労こんぱいの感じに、クライアントの内面での焦り、無力感、さびしさが伝わってくる。

将来の就職に有利だということで、両親の勧めゆえに専攻した〇学に、なじめなさや後悔、受動的な義務感を感じている。専門を就職のための道具として選択したことへの、自責の念や罪障感に悩んでいる。いま“暗礁”に乗り上げた感じを表明するなかに、ノイローゼである自分の、ほんとうの生き方に直面し、気の抜けたような話し方からは、深刻さのみが伝わり、カウンセラーもともにその深みの中で、重苦しさを感ずっている。

1. 6.<21回目面接（6月11日）から30回目面接（10月29日）までの経過の概要> 21：病院のN医師に、友人関係の悪さが、いまの状態をひき起しているといわれて、びっくりした。よくしっくりとくる感じ。自分は幼少の保育園に行っている頃、クラスの仲間におどされて、とてもイヤな思いをしたことがある。それに小学校時代の女の子（成績優秀で厚かましかった）のこともある。自分は、女性とのあいだで、特に感じがつかめない。何か自分が冷い、嫌がられているのではないかといつも感じている。友人が自分の下宿を訪ねてくるのも、あまり好かない。

22：前の時間（専門授業）とこの面接の時間が一番疲れる。梅雨時は、むし暑く、身体がけだるい。いま話題がないので、とても緊張してしまう。

23：（話題がなく、考えるふうでもないのに「ここにはどうしようもなしにやってきているみたい？」と尋ねる）そう。話をただきいてもらっているだけみたい。要求が何もきいてもらえない。どうしようもないみたい。ここにきて緊張する。（ここでカウンセラーの心づもり―「よく話を聴くこと」を伝達し、クライアントのいう優越感と劣等感の同居について、カウンセラーの考えを伝達する）。自分は専攻外の科―理工、医に劣等感をもっている。

24：2年次の成績で‘優’が2つしかなかった。奨学金をうけているのに困った。学校生活に疲れる。授業中疲れから居眠りをする。下宿に帰ると、ホッとすが、勉強に身が入らない。夜の寝つきも悪い。夜中に近頃、夢をみることもある。「郷里の家で、母や妹（上の妹、高1）の夢をみる」《夢②》 自分は、そういうつもり（女性、セックスへの関心）ではないと思い、目覚める。自分は上の妹と一緒に、異性の関係についてききたいと

思っているからではないか。大学でも、女性の心理がわからないで、困ってしまう。

25：いま集中講義をうけているが、疲れてだるい。大学の授業は、無味乾燥である。近頃は、下宿に帰ってもあまり勉強していない。自分の所属学部の人の就職は、すでに5月頃から推薦を始めている。先生（カウンセラー）の学部はどうか。レポート課題も出ているし、夏休み中の帰省は、まだ決めていない。

26：いま図書館で勉強している。好きな専門の勉強というわけではないので、本を読んでも居眠りをはじめてしまう。目覚めると気持ちわるい。ここ数カ月無為にすごしたと思うと気になって落ちつかない。でも、今年は昨年よりもましな感じである。今月一杯（7月）、こちらにいて、それから帰省する。（居眠りをしはじめたり、アクビをしはじめたりして、あまり話したくないふうである）

27：《夏休み明け1回目》昨日、専門科目の試験があり疲れた。《あまり話すふうでなく、カウンセラーはここでの話し合いの意義を明確化する》自分は、対人関係の問題が残っている。対人関係が煩わしいので、敢えてつきあおうとしていないようだ。男ならいざ知らず、女性の場合に特にそうである。自尊心、自信を失ってまでつきあわない。（「苦い経験ある？」）ある。いいにくいことだけである。注2）（「どんなこと？もしよろしかったら」）中学校のとき、想いを寄せて、親しくしていた女の人が、高校に行って急に冷くなった。そういうことがあって、自分はとてもショックで、さびしい経験をしたことがある。その人は、いま短大を出て、田舎に勤めている。その人は、クラスでも特に優秀で、目立った人だった。

28：前回のこと（失恋体験）について、先生（カウンセラー）の方からどういうことでもきいてほしい。あれを話してしまってから、自分はすっかりしてきたみたいである。それまで女性に対して、コンプレックスをもっていたのが、ひっかかりがとれ、すんなりしてきたみたい。やるせない気持ちがすっかりしてしまった。‘女性問題’は、これまでと変ってきた。しかし男女に限らず、大学でのこれまでの交友関係は、‘好き-嫌い’によってはっきり色分けされているみたい。下宿でも色分けしている。自分は、学部がちがうと特にいけない。将来の進路は、やはり公務員か大学院を目指したい。企業は向かないし、不況のおそれがあるし。

注2）このクライアントが一貫してテーマにしている女性に傷つけられた経験のこと。セックスに基本的に関連のある内容である。

29：《授業が休講のため、10分早く来室》先週は何を話したか忘れた。勉強の方は、いくらやっても際限がなくて困る。専門の勉強は、ピッチリとスケジュールを組み、遊ぶヒマはない。でも、3年次になって、友達と月一回くらい酒を飲むので、金が要るので困る。

30：先週はどのようなことを話したか？（「友人とのことだった」）《あまり考えていないふう》（「病院にはまだ行っている？」）行っている。家族についてきかれた。Y医師も、自分が原因であるというふうに思っている。いま自分は、友人とのことより、学業のことが問題である。勉強に打ち込めない。自分の学部の○○は、出欠は緩やかである。友人の中に、ある教官の授業に対し「あんなつまらない先生やめさせてしまえ」というのがあるが、自分はそうは思わない。しかし大学の大人数の授業は、一方通行でやり切れない。自分の専門領域が一番自由みたいで、かえってつかみどころがなくて不安である。専門の勉強は、きりがなくて、やり切れない。

面接印象：自己の対人関係のまずさを、医師から指摘されて、自分の児童期→幼少期への探索を続ける。他人に嫌われることを、恐れている。

梅雨期に入り、本人は目を充血させ、疲れた様子がみなぎっている。足をひきずるようにして来室する。面接中も終始疲れ気味で、自発性が乏しく、あまり考えたり話したくもないふうで、沈黙がちである。こここのところのクライアントの「何とはなしに来談しているふう」がカウンセラーにも感じとれ、低迷状態と一緒に克服すべく、「場面構成」をしなす。

「場面構成」をしなすことによって、クライアントは、また比較的よく話すようになる。その内面は、あい変らずうっとおしい、最低の気分であり、なかなか浮き上がらない。カウンセラーも、大変苦勞が多い感じである。24回目の面接中に、3度も電話がかかってくる。クライアントは落ちつかないふうであった。クライアントは、また夏負けすることを話題にするが、口ほどではなく、いつもの「赤ら顔」はみられない。自分の問題の掘り下げを避けているように、カウンセラーには感じられる。珍しく散ばつをして、さっぱりとしてやってくる。夏休みで帰省するため、身仕度をしてきたものと思われた。《クライアントは各休みには、すぐ帰省する》

夏休み明けの来談の印象：2カ月ぶりの対面であるが表情や話しぶりに特に顕著な変化は感じられない。疲労感は相変わらず強い様子であるが、ややたくましくなったかのような気もする。

27回目の面接の後半で、女性に対する抵抗感が表明される。これまでクライアントがふれようとして、十分に言及しきれなかった「失恋体験」－中学時代の級友の女

性と親しくしていたが、高校進学を機に、急に冷くなったという苦い、外傷体験－を表明することによって、話し合いが深まる。クライアントもこれを通して、表情もすっきりし、珍しく「笑顔」さえ交えながらの話しぶりである。

しかし29, 30回にみられたように、前回の話題をカウンセラーに面接場面で尋ねたりする。来室時までの授業に疲れて、考えたり感じたりしないで、ふらりとやってきてカウンセラーに話題をゆだねて、自分で考えようとしなす。それほど、疲れて、元気がなく、低い声で話し、ときには生アクビをしたりする。勉強にキリがなく、義務感が強く、充実感は少ない。クライアントの空しい感じがよく伝わってくる。

1.7.<11月12日：大学病院のY医師と電話で話し合う>

これは、本クライアントと面接を開始したときに問題として感じていたことを、この際すっきりさせたかたちで面接を行なうことが必要だとの判断で、クライアントが来室する前に、Y医師と連絡をとって話し合った。

当方が尋ねたこと：①「病院と当方とでの併行面接の意味をY医師はどう考えるか。」②「クライアントの予後や見通しについて」③「医師の現状での診断について」指示を得たいということ。

Y医師からの電話連絡：（当方から3度目の電話をしたあと、クライアントが来室する直前に電話あり）「男性性の弱さ；父－母－息子（本人）の関係がOedipus期にとどまっている。思春期を越えていない。当方との併行治療は差支えない」とのことであった。

1.8.<31回目面接（11月12日）から39回目面接（1972年

1月28日）までの経過の概要> 31：《25分遅れて来室》友達と話し込んでいたら、つい遅くなってしまった。散ばつをして、パリッとしたらひやかされて、色々話し込んだ。何時か、自分の時計はこわれてしまい、修理代がかかるのではめていない。大学祭の期間中、帰省して重い荷物－流行のカゼーをもらい、下宿でずっと寝込んでいた。いまは快方に向っている。3年次の秋になったので、就職とかの進路を決めなければならない。自分は公務員か、大学院進学かは未確定である。こここのところ、一応落ちついて勉強に取り組んでいる。でも授業は、相変わらずおもしろくない。《面接終了後、「ノドがかわいたので」と湯を所望する》。

32：《クライアントは入室して、無雑作にコーヒーポットをとり、セットしようとする。湯が沸いて、コーヒーを自分で勝手に（自由に）入れる》注3）カウンセラーに「どうぞ」とコーヒーをすすめる。《カウンセラーは理由を告げて遠慮する》《クライアントはコーヒーを飲みはじめる。そのあいまに話をきり出す。》自分は、下宿

とここ以外は落ちつかない。いつも緊張している。下宿には、同宿人で一番早く帰る。工学部の人は遅い。下宿でボサッとしている。勉強の面では、図書館なんかに行っても本が少なく、満足いかず、何か残してきたような気がして落ちつかない。

33：《前回同様、ノドの渇きを訴え、コーヒーを用意する》この部屋は、乾きすぎである。前回、自分はどんな話をしたか。来月2日に一科目の試験が迫り、イライラしている。期末試験《2月》も迫ってくるようで不安だ。1, 2年次の学業成績が不振だったので、ますます自分は束られた、きゅうくつな感じである。専門の〇学は“実像”で、きゅうくつである。小説なんかは“虚像”でおもしろい。“遊び”の部分がある。歴史小説で、比較的短いものがよい。自分は、歴史上の帝王よりも、悲劇に終る人物に共鳴を覚える。

34：《いつものように面接前にコーヒーを飲む》この前、夢をみた。「郷里の近所のオバサンが突然出てきた。そして目の前に現れて、自分は怖かった。びっくりして悲鳴をあげたように思う。」《夢③》この夢の話病院の医師に話すと、“周囲の人の目を意識している”“郷里から逃げ出したい”のだといわれた。自分はよくわかるように思う。田舎の人間関係の重圧から、脱出したいと思っているようだ。しかし、その反面では、自分は家では長男であり、2人の妹のめんどうを見なければならぬ。郷里の又従兄弟《2浪して私大一流校へ入った》とライバル意識をもっていると思う。自分は、一方で他人の意識や目を気にしながら、もう一方でさびしがりやである。この大学の地に脱出してきたという気持と、他方でこの土地に知人がいないということの孤独感。けっきょく、“郷里”を捨てることができない。妹2人のめんどうを見なければいけないこともある。

35：《カウンセラーが、隣室で別のクライアントと面接を済ませて帰ってみると、クライアントは部屋で、2人組の女子学生-卒論学生と待っている。》さっきの女子学生2人のうち、1人は自分に対して横柄な態度である。自分は、女の人に馬鹿にされたと思うと、ひどく腹が立つ。もう1人の女子学生は好感がもてる。自分は、さっきのようなことがあると、どうも落ちつかない。気

注3) いつも刀つき矢折れた感じで入室するクライアント・イメージがあったので、カウンセラーはお茶を所望されて用意しておくことにした。ノドの渇きは、投薬のせいかと考えていた。しかし、このコーヒー・ポットを用いて、自由にお茶を入れる行動は、クライアントのOral-needを満足させるだけでなく、傍若無人の勝手な行為かと、あとで気づいた。“厚かましい”行為、遠慮ない行為である。

分が動揺して、落ちつかない。自分は、相手が2人組だと圧倒され、馬鹿にされた感じになる。自分は、女性との接触では、苦い経験がある。小学時代に同じクラスの女の子で、成績も同じくらいの子に、厚かましい、強引な態度にでられ、とても苦痛な経験をした。同様なことは、中学、高校でもあった。成績が下位のものには、自分の優位を感じ、安心することができた。自分は、甘える場合、母親よりも父親に対してであった。

36：《カウンセラーが一寸席をはずしているあいだに入室し、いつものようにコーヒーをセルフ・サービスしている。》学期末試験が近づいて、気分がイライラする。〇学は、もともと得意でない。それにやらなければいけないことが苦痛である。《このあと、クライアントは〇学のなかの各専攻科目と性格について説明をする。〇〇を専攻する人は、正義感の強い人である。自分もそうである。》

37：《新年第1回目面接》《部屋でコーヒーを用意している。》学期末試験や就職試験が近づくにつれて、落ちつかない状態がつのってくる。自分は、いま時間をもて余している。散歩とか、気分転換に他のことをしようと思っても、それができない。自分に対しても、“自傷的”になっているみたい。両方の方向に向いては困ってしまっているロバみたい。これまで、小、中、高とそれぞれで借金していたことを精算してきたみたい。好成绩をとるとか、合格をするということ、大学ではどうなるか、自分は勉強しかやることのできない人間である。

38：《いつものようにコーヒーをセットする》この前ここでどういう話をしたか。（「忘れた？ 自分の感情を」）思い出してきた。‘借金を精算する’ということ。自分の場合、問題を絶えず理づめに追求している。理づめにやるということ、自分を抑えつけていた。この頃、企業の案内状、パンフレットが下宿の自分宛に来るので迷う。自分は人に“差”をつけられることを非常に強く感じる傾向があるのを、近頃強く意識するようになった。中学から高校に行くとき、“二流高校”にふり向けられたことの悲哀感である。腹いせ、敵意ということ、いつも感じてきた。女性に冷たい仕打をうけたというのも、その女性が一流校へ行ったから。自分の所属学部の1年上の女性が国公試験に受かり、ショックだったのもそれによる。その女性に敵意やねたみをもった。その人は、3年のときに受かったから、いまも在学している。自分はその頃から、“心臓神経症”みたいになったようだ。

39：《コーヒーをセットして飲む》事務室で求職カードもらった。就職か進学かを書くことを決めかねている。記入欄も、自分の性格や思想のことを書く項目もあ

り、どんなに書いたらよいか迷う。○学の勉強は、どうも忍耐や厳しさが必要である。専門書をたんねんに読む力がなくて困る。就職の場合も、そんなに切りつめてやっていくことに困難さを感じる。事務系の公務員が自分には向いていると思う。生きていく上で、学問、教養、その他3つが必要だが、自分は○学のこととで精一杯だ。自分には完全癖のところがある。これで偏頭痛や心臓がドキドキした。このようなことを経験するのも、中学から高校にかけての、二流校にふり向けられた“怨念”によって、負けず嫌いになってきていると思う。

面接印象：このところの経過での印象としては、クライアントは、自分が神経症に陥り、劣等感（その裏がえしとしての優越感）を感じるようになった原因を、これまでの学校生活での、同級生の女子に厚かましい、強引な態度に出られたためによると考えている。さらに他人に“差をつけられる”ことによる屈辱感、敵意、腹いせになっていることからだと認知している。それを見返すために、わざわざ郷里を出て、他の地に求めて優越感を感じるによって見返えしたいと感じている。

そして、そういう自分は正義感に燃え、ムチ打って○学を専攻するが、その勉強は満足感がもてず、苦しさや義務感がただよっている。一方で自分のそのような態度に“検事”になり、もう一方で“被告”に仕立て上げて“弁護人”になっている。そういう相克する自分にも、すっきりとした感情をもてず、小説の世界、とりわけ“悲劇”の主人公と同一視してしまおうとしている。

面接場面でのクライアントの行動として、ノドが渴いたことをきっかけに、コーヒーを自分でセットして入れて飲むという態度、話題を考えてこないでカウンセラーに依存してしまう態度などにみられるように、クライアント自身、自らがそういう問題を起こす張本人であることへの気づきが、まだまだ希薄である。このようなクライアントに、腹だたしさを覚えるが、それを指摘するほどのカウンセラーの強さも自覚できないまま、カウンセリングが流れてきているように感じられる。

1.9. 40回目面接（2月4日）：Tカウンセラー、Cクライアント

（この回もクライアントは、入室してまずセルフ・サービスでコーヒーを入れはじめる。自分が飲めるようにしておいて面接をはじめ。）

T1 さあ、じゃあ45分まで《こしかける音》

C1 まあ、この前3時頃（ウム）下宿に帰って、あのコーヒー入れて飲んだんですけども（アー）大体あの効果が出てくるのが、一時間ぐらいたって4時半からぐらいですね（ウムウム）その頃頭が冴えるというか（アーソウ）

T2 ウム、やっぱりコーヒー飲むと頭が冴えてくる ウムウム

C2 まあ、冴えてきますね（ウム）その代り疲れがこう

T3 疲れがでちゃう（ええ）ウム、ウム でやっぱり疲れて横になったり、ぐっすり休むの？

C3 いいえ、あまりそのあの一、何ですか昼寝などしますと、夜寝られなくなっちゃう《苦笑しながら》もんですから（ウムウム）
。。。。。

T10 頭が過労気味って

C10 ときどき何かうなされるようなことがあるんですね（ホー、ウム）どうしてなんか一寸わかりませんけども。

T11 自分がふと気がつく（ハイ）うなされたって

C11 うなされるのは、今までは真夜中だったんですけども（ウムウム）とすると、起きる、まあ眠りが深くなってくるんですか、深い眠りからだんだん浅くなってきて（ウム）丁度起きる前ぐらいに、ときに一寸うなされる（ウム）ようなことがあるんです（ウム）

T12 それは近頃自分に起きています

C12 えー、そうですね

T13 ウーム、何かわからないけれどもね

C13 えー、そうですね（ウーム、ウム）それで、今までのうなされる方とちがうことは、今まではうなされた場合には、うなさせたまあ夢というもの、まあ夢でうなされますが、その夢の内容きちんと覚えているわけですけども（ハイ）この頃何かその夢の内容覚えていないんですね（ウームウム）うなされたなーというのは覚えているんですけども（ウムウム）

T14 内容は判らないけれども、気持のわるいっていうか（ええ）うなされているっていうことですね（えー）ウム ウム
ビックリして目が醒めちゃう

C14 いいえ、あの今まででしたら、あのーその“ドキッ”として心臓に痛みがそのくるっていうことがあったです（アー、ハイ）ところがそのうなされたらうなされたその状態で（ウムウム）何かその一種の（ウム）起きても今までみたいにハッキリと（ウム）目が醒めなくて、寝ぼけたような状況で起きているわけですね（ハイ）《数語不明》（フムフム）あ、それでこれは夢だったと思っただけで寝ちゃうわけですから（えーウム）

T15 ウム、で、つまりそのことは夢だったということで安心してまた（えーそうです）眠ることができるウムウム。前だったらこう心臓が何かしめつけられる感じだったけれども。

C15 えーそうです。ただまあ、あの、この前も別に心臓がしめつけられる、そういう夢じゃないんですけども記憶に残っているものの中で（ホー）あの前にお話した（ウム）3月に司法官試験に受かった人《女性》に対する敵意（アー）が夢の中にあらわれたことがありますけれど。

T16 アー、アー、ソウ、内容がね（えーそう）ウムウムとってもこう腹のたつことだった

C16 そうですね（ウン）腹が煮えくりかえるような（アー）感じの夢でしたね（ウーム、ウム）一沈黙40” — 《夢④》

T17 今朝なんかでもあったわけ、そういうこと

C17 えー、今朝も一寸うなされたようですけど（ウムウム）あの確か、6時頃か、6時頃だったと思います（ハイ）時計をみているわけじゃないので（ウムウム）記憶はないですけども（ウム）

そして自分は一寸排尿の回数が多いと表明し、尿意を催して半分目が醒めている感じになると述べる。

T23 不快な感じなんですね。夢としても。

- C23 まあーあの（ハイ）まああの一度だけ、わりと快感というか（ハイ）何ですか（ウム）丁度、鳥になって空を飛んでいるような夢（夢⑤）をみた（苦笑しながら）ことありますけど（ホウ、ウムウム）そのときは、非常に心地よかったですけれども（アーソー）ふつうは大体その夢というと“不快”な夢が多いですね（ウム）
- T24 自分の場合、気持のよくない夢が多いみたいって
- C24 えーそうですね（ウム）でも、鳥の夢といっても、自分はもちろん鳥であったという記憶があったわけじゃないですけども（ウムハイ）その何ていいますか（ウム）何かその草原みたいなところで（ハイ）草原が近くなったり遠くなったりするんですね（ウム、ウム）ということは鳥が上ったり下ったりという（ナルホド）感じなんですわ。
- T26 ウン、自分が鳥って感じもわかるね（えーそうです）とても素適な感じだった（やさしく）
- C26 というよりも、何か一種のスリルという（アー、スリルみたい）感じて、目まぐるしくその草原の（アー上ったり下ったりする）しているわけです（ウム）《やや間》あの場合には、かなり色がついていたですね（苦笑）
- T27 アーソウ、ウムウム
- C27 ついてましたが、緑色でしたね（ウム、ウム）僕の夢の中には、その（ハイ）そういった完全に視覚的な目に見える夢と（ウン）その何ていいますか観念の夢といえますか（ホウー）何か考えごとをしている夢とがあるんですね（ハイ）夢、夢うつつの中で（ウム、ウム）
- そして、観念の夢として、“敵意を感じる”女性の夢へと言及していく。《夢④》の自己内明確化をする。
- C32 結局、その、そういう敵意は、その前は自分のひとりっきりで考えているわけですが、それには絶えず相手がいるわけですね（ハイ）いわば第三者に対して、（ウム）その敵意の表明というのが行なわれるのですわ（ウムウム）実際に、実際問題としてはそういう敵意というのはできませんから（ウム）
- T33 ウムウムむしろ夢の中でそういう敵意をこう発散させている（えーそうです）そういうことを感じるんですね（ウム、ウム）
- C33 それが要するに、敵意が言葉として表現されてくるのです（ハイ）《クライアント、コーヒーを飲んで茶碗をおく音》
- T34 —沈黙20” — 夢の中で感じる敵意って、自分としてもずいぶん強いものを感じている。
- C34 えー、実際、夢の中にあらわれてくるものはそう。
- T35 すごい感じさえる
- C35 そうですね。こんなに敵意をもっているとは思わなかったですね（苦笑）
- T36 あーそう。ウムウム 自分ながらこう感心するみたい
- C36 えーそうです
- T37 まあそこには自分自身のこうすごさっていうか、そういうものを感じる感じ？
- C37 まあすごさということではないですけども（ウム）平常はそういう敵意というのは、まあ、たとえば他人に表明することも当然できないわけですけど（ハー）それから、もちろん自分自身で、自分のことを考えていたら何もできないですから（フム）
- T38 現実には、そういうことはできないけれども（ウム）夢の中で強いそういう敵意を現わしている自分なんですわ。

- C38 えー（ウム、ウム）
- T39 なんか自分ながらびっくりする感じさえる
- C39 えーそうですね（ウム）一寸、驚ろいたですね（ウム）《コーヒー・コップの音、飲む音》
- T40 —沈黙40” — やっぱりそういう夢みたときの危機意識、朝っていうか、日中っていうのはどんな感じ？ せいせいした感じする？
- C40 いえー、その時には、むしろそういう自分にあきれたというか（アー、ハイ）あきれてしまって、どうしてそういう敵意を夢の中で見るほど持つんだろうと（ウン）思ったんですけどもねえ、《苦笑しながら》（ウン）しかしまあ現実に立ちかえてみると（ハア）やはり敵意をもつ理由を（アー）判りますけど（アー）
- T41 つまり現実のなかで起ったことは、夢の中でも起っているわけで、つながっているみたいですね
- C41 えーそうです（ウムウム）
- T42 で現実にそういうことに直面するとウンザリする感じ
- C42 まあ、不快感を味わいますね
- T43 ウン ウン おもしろくないってね（えーそうです）ウン
- C43 —沈黙1'07” — しかしかえてむしろその（ウン）敵意の対象というのが明瞭にされたという意味で（ウム）かえてある意味で一つの問題が解決したわけですけど。
- T44 なるほど、そのことで夢を経験することで、自分が一つのこと直面したということですね（えーそうです）

このあとさらに、現実レベルでのその敵意を感じる女性—司法官試験に在籍中に受かった女性のこと—と自分の心の状態を表明し、かえて「清々している気持」を表明していく。でもその女性も、もうじき卒業してしまう（目ざわりと感じるとともに物足りなさをも感じる）。自分の場合、このような敵意には、やはり頼れるのは知的能力しかない。その他では、視力が1.2～1.5 だということ、これはいまだき稀少価値である。自分は目の水晶体の網様筋を意識的に操作して近眼にしてみれる能力もある。眼には自信がある。ときどき企業から就職ガイドを送ってくるが、自分の性格上の欠点を考えると、どうも敬遠してしまう。そういうガイドをみると、自分の決意—公務員とか進学—が乱れてくる。

<40回目面接の印象>春休み前の最終面接であった。クライアントは、夢④⑤を通じて、自分の日常意識の上では避けてみないようになっている心理内界での出来事に出くわし、意外にもその対象を通じて自分の敵意や腹立たしさを覚知する。その夢を通して、自分というものを再認識しつつある。敵意を感じる相手《司法官試験にパスした1年上の女子学生》を積極的にみつけ、そこに自分の存在意義を明確にしつつある感じで、そのクライアントに付合ってきた甲斐があったとカウンセラーもうれしい感じがする。

1. 10.<41回目面接（4月14日）から45回目面接（5月

までの概要>クライアントは4年次。

41: '死'の恐怖は、大分軽くなってきた。この原因は、小学校時代の“竹馬の友”が溺死し、競争対抗する相手を失なったこと、その君の母親に郷里に帰っても突然会うのではないかと挨拶がうまくできないことの恐れであった。自分は郷里に帰ると、周囲のものの自分に対する視線がきついように感じる。小学校時代から、すでに支配-被支配という関係を感じてきた。自分は、大学進学に際しても、郷里での過去の人間関係の煩わしさから逃がれることのために出てきている。これからもそういう脱出の方向をたどることだろう。

42: 《面接前にクライアントは茶を飲む。医者にノドの渇きと投薬とは関係があるといわれたとか。》4年になって、同級生の民間企業への就職が内定し、そのうれしそうな顔を見ると、イライラした気持になる。自分は3つの進路-企業・公官庁・大学院のうち、公官庁か大学院を目指す。地位が保てて、他人に優位に立てる職場がよい。父親は高校は一流校、自分は二流校の出身。それも、大学入学により差は帳消しになった。父のいまの地位は低い。しかしそれ以外では、自分は父親より劣位である。妹たちよりは優位であるが、自分は父にけしかけられ、劣位になりそう。

43: 《珍しく10分遅刻して来室》友達は就職が内定し自分にイヤがらせをしているような感じをうける。自分は国家公務員試験を目指す。落ちるのではないかと不安である。父から2万7千円の月額仕送りをうけているが、父に束縛された感じ。父の仕送り金で買った本などみると、“吐気”がする。一度アルバイトで5千円かせいで映画やボーリングをやって、気持がよかった。父に勉強するよう期待された自分は、きゅうくつに感じる。

44: 次週から、司法官試験の一次がはじまる。自分の場合、受かる可能性はほとんどないと思う。“人事を尽して天命を待つ”といういまの心境、いま心配なのは、自分が、体系的能力や学習効果を上げる技能にすぐれているかどうかということ。自分は表現力が弱いのではないかと思う。《このところコーヒーは飲まない》。

45: 《来談時、廊下を足早に軽くやってくる》先週日曜日に司法官試験を受けてきた。3時間で90問だが、一通りやって50分経ち、疲れてか、ガックリきた。頭も痛くなり、気分が変になった。でも一回受けると、見通しがついて、来年もう一回受け直したら、できないことはないと思った。自分は人に敵意を感じることもある。それをいままで抑えてきたと思う。学部の教官が、1年上の女子学生で、3年時に司法官試験をうけて合格した人がいることを、授業中に話した。“差別意識”を感じた。自分は、いままでその女性には、成績がよくない自分を

卑下して、口も利かなかったが、その女性の方から話しかけてくれて気持が楽になったことがある。

面接印象: クライアントは、前回(40回)面接における気づきをしたあと、春休みに帰省し、経験したことの総括をやってくる。つまり他人への恐怖心や視線恐怖に悩みながら、絶えず劣位者か優位者を意識し、敵対意識をもつ自分。昔の人間関係の煩わしさから逃れたい方向をまだ志向している。そうまでして、苦痛から逃がれたクライアントの心情がカウンセラーにも重くのしかかってくる。

4年次になり、いよいよ進路への身のふり方を迫られてくる。公官庁・大学院進学を決めながら、どの方向に行くにも、感情の底には、他人より優位に立ちたい、男尊女卑の気持が流れている。妹にも、能力的に劣等感もちはじめている。そして“父親”との対人関係も表明しはじめるが、父親との心理的葛藤を克服しきれず、仕送りを通じての‘不自由さ’‘束縛された不安定’を表明する。それを語るクライアントは、低い声で、心理的負担の重さを、カウンセラーにも感じさせる。

近くなってきた国公試験、司法官試験においても“一本勝負”と認識せず、来年への小手調べを感じ、自分の全能力を投入するほどの意気込みになりきれていない感じがする。表面的には、一つ試験が終ることで、足軽るに入室することができる。安堵感を感じさせる。自分の気持の向くままに、被差別を感じる-女子学生との内面の敵意を、リアルに表明する。本気ではなかったとしても、クライアントがこれまで長年重荷として受けとめてきていた国公試験の受験という口火が切って落とされたので、気楽になってきた感じは、カウンセラーにも伝わってくる。

1. 11.<46回目面接(5月26日)から61回目面接(12月15日)までの経過の概要>4年次の冬休み前までの概要である。

46: 国公試験が3週間後に迫り、落ちつかない。ヤケ気味でもある。不眠状態が続くので、医者に申し出ると即効性のものをくれた。勉強や遊びでこれまで徹夜したことがない。この頃、低学年の学生をみていると、自分が年寄りになってきているみたい。

47: 前回どんな話をしたか忘れた。つい最近、司法試験の一次の合格発表があった。交通費がかかるし見に行かない。どうせダメ。合否がはっきりすると、希望や可能性がなくなったみたいで、張り合いがない。自分は自分を犠牲にして、はじめてやっていた。“王様”であり、同時に“奴隷”である。近頃、以前ほど不安でなくなった。“生”の目標があったときは、“死”に直面したみたいで気分も動揺したが、いまは“老化”した。

48: ここ《4階》まで来ると息ぎれがする。近頃“年

寄った感じ”がする。司法官試験は、本学の現役、一浪組は“全滅”であった。自分は納得がいく。公の試験は権威者の出題であるので、恐怖心、不安感がある。

49：公務員試験があと一週間内に2つある。いまの心境は、登山を苦しいながら一歩ずつやっている感じ。あと一息ということ。自分が束縛されたことで“怨念”“恨み”ということばが使われる。水俣公害病患者はチッソ工場に押しかけられるが、自分のはちがう。“怨念”というのは、何も表現されず、発散できず、“憤り”を内に秘めているのだ。アベックをみても、自分は“被害者意識”をもってしまう。自分の才能が伸びないのは、目の前に“女性”がいるからだ。

50：試験が2つ済んだ。1つは寝坊して不受験。寝坊した自分はいやしいが、傷がつかずに済んだことになる。自分の性格は、こういうところに出る。“差”をつけられそうになると、こちらから逃げてしまう。

51：大学院受験のことで指導教官を訪ねた。「〇学をやるには謙虚でなければいけない」といわれた。自分は‘謙虚’ということばに抵抗を感じる。このことばは、心の底に‘傲慢さ’を秘めており、優越感に通じる。大学院受験の能力の有無は自分でもわからない。現在の心境は“断崖”の上を歩いている感じ。谷底も見える。

52：《窓外をボーッとながめている》いま、ある決断をして心理的に虚脱状態である。1科目2単位とれば、自動的に“卒業”になるが、これは放棄することにした。自分は、自分の歩む道AとBの両方を歩んできたのに気づいた。高校までBを、いま大学ではAを。大学院進学のことと教官に相談に行ったら、叱られた感じ。

53：これまで自分は、どんなことをしゃべったか。このところまた落ちつかず、ディレッタントである。やりたいこと、嫌いなこと(=〇学)両方がある。自分は他人を、能力のある人、ない人とで見分けている。

54：中級国家公務員試験があった。これに失敗したら“留年”も考えている。自分はメシのために、〇学をやっているのだから、そのために自己犠牲を強いている。将来これで確信がもてるかどうか疑わしい。

55：いま自分はイライラしている。一橋大の大学院を受けた。これが今年度最後の試験なので恐ろしいような気がする。これまでダラダラしてきたことで後悔の念をもつ。自分は何に向いているのかわからないまま過ごしてきたことに、とてもくやしい気がする。今まで、大学には“人に能力的に馬鹿にされたこと”に対する見返えしの執念のためにのみ入ってやってきたみたい。これでは社会に出ても不安である。

56：一橋大大学院は、二次でダメだった。でも一次が受かり何とか穴うめはできた。不合格がわかり、家に帰

った。やはり家は落ちつく。父と話し合ったが不十分。これから残る東北大大学院の受験準備をはじめたい。自信もない。来春以降のことも考えないといけないが力が入らない。

57：先日、外務省の中級職の第一次合格発表があり、合格通知がきた。全くあてにしていなかっただけにびっくりした。自分のすべてが力不足だと思っていたが、これで自信もわいてきた。二次試験の面接はまだだが、受かれば、外国の領事館づとめになる。両親と離れ離れになるので、まだ決断がつかかねる。中級職というのも、もう一つパッとしない。また任地での健康のこと《ノイローゼ》も気がかりで、やっていけるか疑問である。

58：《初めて背広にネクタイスタイルで来室》昨日、下宿に外務省から訪問面接調査にやってきた。事前に、通知があったが、自分の“城”にふみ込まれた感じで、とても硬くなり、緊張した。あれこれぶしつけな質問をされ、“無礼な奴だ”と思った。自分の性格の長所・短所をたずねられ、「別にありませんけど」といって答えた。面接のあと、急に気になってきた。いまの生活から早く抜け出したい。中学、高校のような生活をとり戻したい。

59：この間、外務省の面接を受験してきた。ここ一週間、ぐっしょりした感じ。面接試験では、内申書にもとづいて行なわれた。性格の長所・短所の項を空欄にしておいたら、試験官に「自分のことについて書かないのは非協調的だ」といわれた。それ以後、“非協調的”ということばをもとにして応待した。たとえば父親が非協調的だからそうだと。親友について尋ねられたが、親しいほどの友人がいないので、ギョッとした。目下、合・否待ち。ダメなら留年。自分は、大学4年間を“ノイローゼ”の為にすごしたみたい。夜一人でいると不安。

60：この前、突然関西の友達のところに行ってきた。高校時代の友達で2浪して同大に入り、いま2年。これまで果していなかった約束を果せてホッとした。外務省の試験は、やっぱり‘不合格’通知が来た。これから残る最後の大学院試験があるが、あまり期待できない。“恨み”を晴らすためにやってきたみたいだ。中学・高校からずっと、“女性”と“成績”のことで恨みを晴らすため。大学では恨みの相手がないので、ダラダラした感じ。来年は、“不合格にされた”復讐をする目標がある。

61：院入試のため、仙台に行ってきたが、ただ旅行しに行ったようなもの。一切の試験が終了し、虚脱感、焦燥感、憂うつ感におそわれる。自分は近頃、なんとなくヒガミっぽい。悲劇の主人公になって、喜劇の主人公になれない。師走のにぎわいを町でみても、自分だけがふさぎ込み、みじめな気分である。

<46回～61回：面接印象>これまで大学4年間、好きでもない、〇学を、ただメシのタネにするために、両親のすすめでずっと我慢してやり通してきた。そして、司法官試験、国家公務員試験、外務省中級職試験、さらに大学院〇学研究科を、つぎつぎに受験する。その過程で自分がほんとうに傷つかないことを恐れ、寝坊したりする。つまり、これまで悲哀を感じさせられ、差をつけたと思われる人に、恨みをもって見返えしてやりたいという“怨念”を晴らすためにさまざまな試験を受験するが、どれも最終的には報いられない。

そういう自分を悲劇の主人公に仕立ててしまうことであきらめている。それに、自分がこれまで何のために生きてきたのだろうか、という明るさや希望のなさを、力なく表明する。そういうクライアントとともにいて、励ましの力を与えるよう働きかけるが「まあそうです」と気のない応答である。このような状況に立ち至ったクライアントの重苦しさをともに感じることはできるが、カウンセラーとしても“タメ息”がでそうな感じを感じた。年末を迎え、同級生はいずれも華やかにふるまう。しかしクライアントは、だんだん年老いた、無力を感じて、ひがみっぽくなり、焦り、かつみじめに感じている様子が、よく伝わってくる。“大学4年間は、ノイローゼの為にあったみたい”ということばが、いつまでもカウンセラーの胸の中で響いてくる。ひとり立ち、家族からの独立・分離、自己概念としての“健康な自分”の一致と統合には、まだまだはるかな道のりがあるということを感じずにはいられなかった。

1. 12. <62回面接(1973年1月12日)から68回目面接(3月9日)までの経過の概要>《新年初から4年終了まで》

62：このところ気分的に落ちつかないでイライラする。司法官試験や大学院に合格した人と対面すると嫉妬や羨みを感じる。友だちと新年に一杯やろうということになり、“女”の話になった。自分は“童貞”を守っているものは子どもだと軽蔑されたみたい。非常に不愉快であった。自分は、すべての女性は“打算的”だと思う。自分の理想的な女性は、ロマンティックなもの。

63：先週、先生《カウンセラー》に対しても、口を割らない、胸の内を全部みせないといったことで、先生は「卑きょうだ」と思ったのではないか。自分は、何かを隠しているが、そのことがバレはしないかという恐れを感じる。自分は、親、友人、先生に対して、自分のイメージを悪くしやしないかと恐れている。だからあまり深入りせずに、他人にも絶えず良いイメージを印象づけようとしている。“心をかえるということは、自分の敗北を認めること”になってしまいう気がする。大学生活は、“労多くして効なし”に終わった。いまは環境が変わらない

とダメだと思う。注4)

64：指導教官のところに、単位を取り下げに行ってきた。ふつうの学生と逆なことをやったので、自分が優位に立てて、“唯一の満足感”をもった。“能動的にやれた唯一のこと”である。あと半年か1年で、果して留年するあいだに、色々なことを取り戻せるかどうか懐疑的である。春休み中もなるべくこちらにいたい。

65：前週の無断欠席は、カゼをひいていたためによる。《今回は、カウンセラーがインフルエンザにかかり、体調がよくないこと。それに学内で目下起っている「MP I 粉碎連絡会議」の動きについて、クライアントと話し合う。このことについて、クライアントにも考えておいてほしいこと、を伝達する。次回に、この件について一線を画して、再度相談をはじめることにした。》

66：前回話しあったことについて、自分は学生相談をそうは思わない。そもそも自分は、卒業すれば管理者の側につくことになるのだから、管理されているということ自体おかしい。一生管理されていくことから抜け出そうとして相談をうけているのだから、そのこと自体を学生管理と呼ばれるのは、筋がよいである。だからいままでもどおり、相談をつづけて行ってほしい。何でも管理することを恐れては何もできないと思う。《カウンセラーは、逆に励ましてもらったみたいで恐縮した》。

67：この頃、また憂うつである。同級生は、就職も決まって、全く学校に出てこないし、会わなくなった。自分は孤独な感じで、どうしようもない。世間では、よく高校時代が“灰色”だといわれるが、自分の場合は高校よりも大学が“灰色”だった。いまの状況は、自分にとって危機状態である。自分は社会に出れば、きっと大学時代のことは葬り去ってしまうと思う。自分は“春”は苦手である。

68：《この間一回無断欠席。カウンセラーは夜9時半頃、国電N駅でクライアントのうしろ姿をみかけた》(「前回来談されなかったのは?」) 下宿を転居したので来られなかった。自分の勉強のクセが気になる。一回手アカのついたものは、二度目を読むのがイヤになる。いままでの勉強の仕方は、受験対策から出るもの、出ない

注4) 正月明けのこの回(63回面接)から、学内の「MP I 粉碎・背番号制導入阻止連絡会議」と名のる一部学生グループが、学生相談教官であるカウンセラーの個人追求に来はじめる。カウンセラーとしては、こちらの方にも相当の精神的エネルギーを費やすことになった。また、いつ追求にやってくるのかわからない“不安な状況”もたびたび感じるようになった。しかし、その後も、面接そのものの妨害をされることはなかった。面接そのものを妨害されることは、クライアントの基本的な人権の侵害だと、カウンセラーは考えていた。

ものを区別せずにやっていた。これから計画を立ててやるのでは遅いのではないか。○学には、以前教官もいていたが、素質のようなものが必要だ。父親とのことで自分は“あいまい”を感じ、かえって何を期待されているのかつかめない。どうも父親には、頭が上がらない。

<62回～68回：面接印象>これまで心理状態がよくないときのような、顔を赤らめた、イライラとした、落ちつかない表情である。学友は、それぞれ身の振り方が決定し、ほとんど登校しない。周囲の人、女子学生に対し羨み、被軽蔑感を感じる。また、63回にみられたようにいま一步、他人の前に自分を空け開けにできないでいる。そのようなクライアントに、あわれを感じる。しかし64回目には、自分が大学生活でやれた“唯一”の行動（単位を取り下げ、留年を決定したこと）に満足を感じ、その決意のほどは、カウンセラーによく伝わる。もう一步もあとに引けなくなり、カウンセリングにも積極的に来談したい意向を表明する。

学内で提起された問題に対しては、クライアントの考え方を述べ、むしろカウンセラーは励ましを受けるかたちになった。カウンセリングを一つのよりどころにしている様子が伝わり、カウンセラーもクライアントと学内学生グループに積極的に対処していく決意を固めることができた。

下宿を転居することで、クライアントは新しい体制をととのえようとする。しかし、これからの一年をすぐす孤独感、重圧感、そして父親からの“あいまいな期待感”には、とても苦痛がこもっている。いつまでたっても自信回復をしきれないクライアントの、重く長い道のりに思いを馳せる。

1. 13.<69回目面接（4月13日）から74回目面接（10月23日）までの経過の概要>《クライアント5年次になる》

69：3月16日は来室したが「帰宅」表示があり、引きかえしたとのこと。《カウンセラー、その時間に合わせて来室したがすでに帰ってしまったあとだった。》ここ数日前から、とても不安定になり、落ちつかなかった。病院の薬は、いままであまり服用せず、捨てていた。この一週間不安定になり、しようなしに病院に行き「薬がなくなった」といって整剤してもらった。そうすると、何か少し安定してきたように感じる。春休み帰省したら、両親とも自分のことを心配している。このまま社会に出てもノイローゼが続くのかどうか心配である。これから早速、今年度の司法官試験があるが、同級生はいないし何か心細い、不安である。2日前変な夢をみた。「舞台に侍が数人いて、一人が“生首”をさげている。」《夢⑥》こんな変な夢、不可解で不安であった。自分は、観客席からながめているが、ゾッとした。自分は、歯が悪

くて、人より劣等感を感じる，“年老いた”感じ。新入生をみていると、ピチピチしている感じがする。

70：昨日、自分の大学の同級だった女性と下宿の近くで偶然会った。なんとなく気分が爽快だった。女性というものが、あんな影響を与えるものかと思うと怖いくらいであった。最近、自分が女性というものに、好意をもっているか、もっていないかということが気になる。好意をもたれたいが、こちらが誤解されやすい行為の“サイン”を受けとってしまう。自分の場合、女性に対してははじめから消極的なことしか態度にも表わさず、自らのカラにとじ込もっていた。悲観的になっていた。そのようなことで、ある意味では貴重な青春を無駄にしてしまったみたいと思う。いままで自分は女性に近づきたいという欲求を抑えつけていた。きのう女性に会い、欲求不満が解消された。どうも禁欲主義はいけない。けっきょく、自分の場合、ある欲求が解消すると、別の欲求が顔を出している。そういう意味では、これからも続くようだ。

71：《10分遅れて来室》沈黙がちに話す。ここ一週間何も心境の変化なし。ストライキがあって、生活習慣が乱れた。司法官試験を2週間後に控え、これから“連休”もはじまるが遊べず、分がわるい。どうして自分はこんな目にあわないといけないのか。ここに義務的に来た。

72：司法官試験が終わって、気が抜けたみたい。いま一つやったことで“谷間”にいる感じ。司法官にならなければいけないということもない。あと一カ月後に、公務員試験が迫ってきた。この方が大事だ。試験には同宿の人は寝坊した。かつての自分の同級生も受験にやっていたが、すでに公務員であり、落ちついていた。とにかく仕事を1つ終えて退屈したみたいな感じ。いま冒険より、安定をとりたい。7月には国公、地公試験が目じる押しにはじまる。

73：先週、無断で相談を休んだのは、一寸郷里に帰って、地元の公務員のことを相談したから。すべり止めのために、受験することにした。家の方では国家公務員の方を希望していた。いまカゼをひいて、ノドを痛めていて声ででない。この2、3日前NHKテレビ“70年代われらの世代”の放映をみたが、ノイローゼが多くなっているというので安心した。さっき帰ってきたので疲れたので、今日はこのくらいにしてほしい。

74：注5)《約5カ月ぶりの面接》また相談を再開して

注5) 6月9日無断欠席、6月19日カウンセラーがカゼにより、ノドを痛め休み、下宿に電話をしたが、クライアントはすでに外出したあと。これ以後、クライアントは各種公務員試験を受験のため、中休み・カウンセラーも身体的健康を害し、休みたかった。

ほしい。7月にあちこちで行なわれた公務員試験のうち国家公務員試験と出身県の公務員試験に合格した。いまだどちらの方に決めようか迷っている。国公試験の面接で「あなたは他人の前で無口で自分勝手だ」といわれた。ショックだった。5人も試験官がいて、圧迫感をうけたからだった。国公試験は、司法官試験と同等の最大難関なので肩身が広い。他人にも優越感もてる。それにしても、大学の学業成績と一致しないので、釈然としない。（「女性と関係あるということ？」）いまでも女性に屈辱感を与えられている。いつか《70回目の話題》の女性とはそれきり。新興宗教に入っていることがわかったし、打算的だ。自分も打算的になる。

<69回～74回：面接印象> 留年をし、5年目を迎えたクライアントは、いままでの力を落とし、不安を表明しながらの様子とはちがひ、表情はやや明るい。しかし心の奥底では、夢⑥に象徴されるように、不安な状態は伺える。

70回目面接では、これまでのどの回よりも、安定ムードで、むしろ浮かれた気分であった。元同級生だった一女性と偶然にあって、“女性”の不思議さ、気持よさを感じ、気分が高揚した。“異性”とのはじめての対話が成立したという印象をうける。気分的にも浮かれ、さっぱりと髪も散ばつし、さわやかである。40回目面接のときは異なる印象の女性への感じを表明する。やっと自らの閉じ込めた、抑えつけた問題の核心へも、瞬間的に歩を止め、肯定的感情を体験しつつある感じがカウンセラーにも伝わり、暗い狭い世界から、突然の明るい世界が開かれたという印象。

71回～74回面接では、女性の話題はカゲをひそめ、専ら生活の糧にすべき公務員試験への取り組みがはじまる。国公と地公の両方に受かり、卒業後の身の振り先の目度がついてくる。紺色の上・下背広、手に革カバンと、パリッとした感じを与え、いよいよ前向きになれそうに感じることができた。しかし、クライアントの心底を脅やかす対人関係、とくに女性関係の不自由感、屈辱感は克服しきれず、再び優越感（その裏がえしの劣等感）がまた現われてくる。

1. 14. 75回目面接（10月30日）：Tカウンセラー、Cクライアント。《クライアントが来室したとき、女子卒業生で学校教員をしている人が訪ねてきていた。》自分は、教育学部の学生に対して優越感をもっている。教員は世間的な評価も、言っでは悪いけど、低いからだ。

C8 《沈黙38”》えーと、ときにこの話はおきまして（ウム）まあ、これは一寸いままでも気がつかないことですが（ハア）。僕、まあ何ていいますか、ノイローゼのきっかけになったかもしれない（ハー）経験がありますので（ハー、ウム）まあ1年の

ときの話ですけれども（ハイ）

T8 近頃、それ思い出したの？

C9 えーそうです（フム）まあ、1年のときは、もちろん教養ですから（ハイ）。で、この学校で起ったことですけれども（ホウ、ウム）まあ1年のときに一応、ほんとうに大学紛争なんで、騒然としておりましたけれども（ハイ）。まあ遅くなって、まあ夜です（ウム）まあ季節は、一寸忘れましてけれども（ウム）。まあ暗くなっていたことは覚えていましたけれども（ウム）、その教養、現在のA号館に（ハイ）B号館・D号館とありますが、D号館で（ウム）まあA号館の方をみていたわけですね（ハイ）そしてA号館のある一つの部屋だけが明るくなっていて、（ウム）でそこに男の人と女の人が《苦笑しながら》おりまして、（ハー）、で何かやっているんですね（ハー）、まあ一つの表現の仕方は、それは“みだらな”行ないですね（ハーハー、ええウム）と私にはそう見えただけですけども、もちろん、現場にいて、その至近距離でみたわけではありませんから（ええ）、ほんとうのところはわかりませんが（ええ、ウム）、大体、一時間ぐらい、その、状況みていましたから（アソウ）（ウム）

T9 明らかにこう離れていたけれども、男女の行為というものが目に映ったわけね。

C10 ハイ、そうですね（ウム ウム）

T10 非常にショッキングだった。

C11 ええ、そうですね（ウム ウム ウム）

T11 で、自分でも気がつかないけれども、ずっと一時間ぐらい見てた自分を思い出したの？

C12 まあ、そうですね（ウム ウム）——沈黙10”——

T12 そのことは、やはりこう女の人に対する敵対心、そういうものと関係あるように思う。

C13 さあ、そこまではわかりません（ウン）

T13 少なくとも、その“情景”を、つい最近になって、自分のノイローゼと関係ありそうに思い出した

C14 まあ、そうですね（ウム）

T14 自分にしたら、今までそんな男女のみだらな行為って、見たこともなかった

C15 まあ、そうですね、まあ（ウム）僕の場合だと映画だとか、そういうもの見る機会とは多いと思いますけど、（ウム）どういうか、ないですね（ウム、ウム）それから映画とか、TVの世界、フィクションの世界ですけれど（ハイ）、現実の世界のものとして（ええ）

T15 なるほど、少なくともその情景は、自分にとってはじめての（えーそうです）非常にこう別のことに思えたわけね（ええ）ウム

C16 ——沈黙30”—— であの当時、まあ教養といっても、A号館はまだ〇〇学部があったですね（ア、ええ）あの、いまの××学部の校舎ができていなかったですから（ウム、ウム）

T16 つまりそういう意味では、〇〇の後身である自分のいるところから、そういう行為を行なう人がいたということ、

C17 まあそうですね（ウム）そういう意味でショックですね

T17 ええ、ショックを受けたし、腹が立った

C18 まあ、腹が立ったといえば立ったでしょうね（ウム、ウム）

T18 そういう意味で、自分にとっては、その状況は目の先がまっ暗になるぐらいな感じだったわけね、嗚然として。

C19 まあ、そうですね。それっきり、みていましたね 丁度クラス

- 討論の最中だったわけですけども(ウーム)クラス討議など、そっちのけで。
- T19 なるほど。 で、いま思い出してみると、ショックな感じですか
- C20 やはり見るんじゃなかったな—と思いますね
- T20 ウーム、見なきゃよかったと思う
- C21 ええ、そうですね(ウーム) — 沈黙30” —
- T21 けがらわしいというか、お互いにこうそんな感じに思えてきている
- C22 いえ、けがらわしいというよりは、まあ的確に表現すれば、いわゆる“ワイセツ”的な感じですね(ウーム、ウム、ウム)
- T22 許せない感じだった
- C23 まあ、人が見ているようなところでやってもらいたくないような行為ですね。
- T23 ウーム、ウム、自分のような純心な気持を傷つけただけにね
- C24 えー、そうです(ウム ウム) — 沈黙40” — これはまあ一種の哲学的議論になってしまいますけども(ウム)そういう行為を、すべてケガらわしいとして、まあ排除してしまえば(ウム)当然、現在のボク自身も存在しえないということになりますから
- T24 ウーム、ウム。自分だって、お父さん、お母さんの(そうですね)行為の中に、生をうけてきているっていうわけだし(そうですね)ウムウム でもそういうショッキングな情景というのは、自分のことを考えると、やっぱりお父さんとお母さんの関係だって、そうではないかしらと思えたの?
- C25 まあー、そうですね(ウーム)まあ、大体高校時代って、そういうこと意識しなかったですけどね(ハイ)大学に入ってからだけど(ウム)。僕もそういうかたちで、この世に出てきたのだなあーということ考えるようにですね
- T25 なるほど、ウム。
- (中 略)
- C37 そうですね(ウーム、ウム)まあ一寸学校の帰り道に、一寸、まあ空のあたりをながめていたら、まあ、ああいうことがあったということを思い出したわけです
- T37 あー、思い出した、ウム ウム
- C38 確か、道を歩いていたら、要するに若い女の人が来たから、単純に“きれいだなあー”と思いながら見ていたら、そういえば確かそういう情景もあったな—ということをやすね。
- T38 なるほど、なるほど、ウム ウム。帰りがけの女性はきれいかった。(えー)きれいだなあ—と思っていたら、1年の頃のこと思い出したって。
- C39 まあ、そうですね。
- T39 そのきれいだなあ—と思えたときの自分は、その場で素直に見れたのかもしれないね。
- (中 略)
- C50 ……(間15”) まあ僕自身あまり(ウン)女性との交際がないですから(今まで少なくともなかった)まあ一種のさびしさみたいなのがあると思いますけど、ほぼ過半数の女性に魅力というのを感じていると思いますね
- T50 ハイ、それが自分のありのままの気持なのね
- C51 そうです。まあ、どこを探しても魅力がない、どうにもならない、醜いといっても一寸表現がきつくなりますが、まあそういう女性というのは、まあ100人に10人、1人くらいだと思いますね

(ええ)

- T51 この世の中には、自分の心に、チャーミングに感じとれない人もいるってことね
- C52 まあ、いますといっても、女性の中ではごく少数と(ウン)
- T52 それは数においては少ない、そんな感じしている
- C53 ええ — 沈黙58” —
- T53 いまでも、異性との、こういう面では、自分にはこうさびしさはあるけれども(ハイ)ウム、でもチャーミングな人、こう多いなと感じてきたしたら、楽しいんじゃないの?
- C54 まあ、そうですね(ウム) — 沈黙30” — 確かに誰も彼も、みんな打算的にみえるということになれば……(ウム)
- T54 ウン、ウム、自分にとってもますますすみじめになっちゃう
- C55 まあ、そうですね—沈黙1’ 30” —
しかしいまにして思えば、どうもそういうふうにいけば(ウム)そういうふうなっているんですか、シコリっているんですか(ウン)“軛”っていうものから解放されるのが、やや遅すぎたっていうふうな感じがしますね(アー、ネ、ウム)1年のときから、大体、いま5年ですから、4年間、軛課せられてた
- T55 自分が、そのこともっと早く思い出したり、できていたら、学生生活もっと楽しかったんじゃないかってね。
- C56 と思いますね(ウム、ウム)
- T56 かえすがえすも、残念だし、くやしいう感じもある。
- C57 まあ、この時間ばかりは、取り返しがつかないですからね(ウム、ウム)
- T57 それだけに、ここ一週間の気持っていうもの、大事にしているわけね。
- C58 えー、まあそうですね(ウム ウム) — 沈黙38” — まあ、先程、あの両親の話がでたんですけども、やはりそういう状況を見ると、当然のことながらやはり両親とてもやっているだろうということ、思う。現在やっているということではなく、過去やっているだろうということになるわけですよ(ええ)やはり両親というもの、ワイセツ的なもの、みだらなものが見えてきたわけですね
- T58 ウーム、かってはそう思ってた。いまもそう?
- C59 いまはどうですか(苦笑)両親に会ってでないとわからないですけども(ウム) 帰省して、そう感じちゃうわけですね(ウム)
- そして自分も将来結婚したら、そういうことやるだろうこと、自分のかつてのクラス・メートの人たちに“女を知る”ということでは、一歩先じられた感じであること等を述べたあとで、
- T69 でも、あなたが女性に対する見方、感じ方が変わってくると、女性だって変わってくるんじゃないの?
- C70 まあ、それは今後の楽しみといったようなものじゃないかと思えます
- T70 ウン ウン こちらがチャーミングに感じれば、相手だってチャーミングに思われているって感じだすんじゃない?(《にこやかに》)
- C71 まあ、かもしれないですね(ウム)

- T71 だから身勝手は遠のいてしまう
 C72 でも、まだ完全にふっ切れているわけではないですけども（ウム）——沈黙30〃——ま—とに角、その情景が、まあ僕の精神に相当の、まあ（ええ）刻印を残しただろうということは（ええ）現在でもやはりはっきりしたかたちで、（ウム）目に焼きついていますから
 T72 ナルホドネ、ウム。でもこれまでどちがうのはあなたが自分で思い出せたっていうことですね
 C73 まあそうですね
 T73 しかも、ここで話せたっていうこと、これまでとはちがう。
 C74 まあ、そういうこともあります（ウム）
 T74 自分でも気がつかない、思い出せないくらい、すごくショックだったわけね（ええ）ウム
 C75 たとえば女性が、どっか遠くからで、顔がわからなかったですけども、髪型が長かった（長かったウン）確かに髪がうしろの方で束ねてあったとか、そんなところまで覚えているわけですね（ウムウム）
 T75 だから実によくもうみえちゃって、焼きついているわけね（ええ）ウム。
 C76 で上がセーターであったとか、（ホウ、ウム）まあ確かコートを脱いだり着てたり、コートといいますか、レインコートとはいわないですか、なんていうか知りませんが（ハイ）脱いだり着たり、ロッカーに入れたりしてたり（ウム ウム）で、かなり背は高めであったとか、そういうところまで（笑）でも、それ以来、髪の長い女性で、かつ頭のうしろで束ねている人みると（ウム？）髪の毛でうしろに束ねて（えー ハイハイ）
 T76 そういう人みると、ギョッとする？
 C77 そうですね。ギョッとするというより、ギョッとしていたんですね（アー）
 T77 いままでではね、はっきりその情景に出てきた女性に似ているというより、思い出しはできなかったけれども、無意識には、やっぱりギョッとしていた。
 C78 そうですね（ウム）
 T78 人の姿って、すんなりしていたの？
 C79 まあ、そうですね。背が高く、まあいわば“器量のいい”“体型”のいい女性でしたね
 T79 ウム ウム 《間15〃》ハイ。じゃあの時間きちゃいましたから、今日は、ここまでにしておきましょう、どうも。
 C80 ありがとうございます。（《珍らしくお礼をのべる》）
 （以上75回面接終了まで）

<75回目面接時の印象>クライアントは、これまで折にふれて表明していた女性との問題を、この回に大学1年のときに目撃した“シーン”を話題にして、より深いレベルでの気づきを行なえた。つまり、自分にかかわる重要な問題、しかもいつもそこを気づきながら“拒否”してきた問題を、ここ一週間のあいだ意識の上で思い出すことができるよう成長してきた。この問題に直面してきたクライアントの努力がとても素晴らしく思えるとともに、カウンセラーの喜びに感じられた。

1. 15. <76回目面接（11月6日）から80回目面接（1974年1月29日）までの経過の概要>就職先の決定を中心に話す。

76：出身県の公務員試験の採用内定通知が来た。両親や指導教官は、地方公務員をすすめる。医師は国家公務員をすすめる。地公だと、家は近いし、住宅問題もない。国公だと医者にかかるのには便利だし、郷里の“くされ縁”を絶つ意味でいいと思う。どちらにするか決めかねている。郷里の地公では、父が地元の役所に働らきかけている。国公のは待たされているあいだ、ノイローゼのことなど内偵されはしないか心配だ。地公は今月一杯で締切り。

77：地公就職のことで帰省してきた。郷里に帰って驚いたことがある。父親が中学時代に国公試験を受けたがダメだったとのこと。やはり父親は“国公”を期待していたのだ。“あいまいで困る”態度である。いままで父親と腹をわって話したことがない。これまでの自分は、いつも他人と劣位にあるのか、優位にあるのか絶えず意識していた。

78：地公の就職決定に伴ない、当面の目標がなくなり気分的にイライラする。下宿にいても落ちつかず、妙に神経質になっている。本を読む気にならず、本のシミばかり気になる。自分は妙に潔癖なところがあり、イヤになる。注6)

79：“学生相談”粉砕グループの学生のピラを、学内食堂で見た。あの学生らの主張するところの“権力者—被抑圧者”という主張は、自分の場合権力がないので、政治権力機構に入ろうとしている。すべて〇学をやるものは、それを目指すと思う。自分は能力的には、他人より優れていると思う。その反面、体力や身体的容貌とかは劣っているというコンプレックスがある。体育でも、中学、高校のときに3か1だった。“顔”は、ある角度からみたときのみよい。一度シャクにさわって鏡を割ったことがある。歯並びもよくなく、40歳くらいになると総入歯になるかもしれない。これからは、対人面でもあいそをよくする必要がある。いままでつとめて歯を見せないために、笑わなかった。

《1月22日無断欠席。下宿に電話すると「すっかり忘れていた」との返事であった。》

80：先週のカゼをひいて休んでいたことでも、家とちがって何もかも自分でやらないといけないから落ちつかない。家ならおフロに何でもしてもらえるが、下宿ではそうはいかない。友達にもいうと、かえってめんどうである。精神科での安定剤を断とうとしているが、いま医者と相談している。口が渇き、舌が荒れている。薬

注6) 12月4日は交通ストの為、国電が不通でもあり、下宿に電話をし、休むことを了解してもらった。カウンセラーの本心は、午前中に学内で学生の“自殺”があり、心が痛んでいたこともある。

を断つのは、卒業すると、一々もらうわけにいかないからだ。大学生活は、もうじき終るが、自分は“メシ”のためだけにやってきたみたい。（「女性問題は？」）これは環境の変化がないと、相手を見つけるチャンスも到来しないと思う。

<76回～80回：面接印象>女性問題をいままで意識の上で拒否し続けたクライアントは、いよいよ就職先決定というもう一つの現実課題に直面する。76回目には、2つの就職先が内定したことで、かえって迷いが生じる。対人関係をも考慮して、どちらも一長一短である。カウンセラーも、クライアントの“新しい門出”に際しての不安、苛立ちをともに味わいつつある。

77回目では、父親の“あいまいな”態度に、クライアントはしっかり行かないものを感じている。それを父にも要求できない。（カウンセラーは、学内の“学生相談”追求学生のこと、頭いっぱいであった。カウンセラーのこの落ちつかなさは、79回目まで続いた。）

79回目では、クライアントは、結局、就職先を地元の官庁に決める。そしてこれからの自己の容貌、あいそ悪さという対人面での回復を切望している。“よい年を”とお互いにあいさつをして別れる。

80回目では、クライアントは新年の第一回目面接にもかかわらず、元気がない。表情も赤ら顔で緊張している。大学生活最後の充実感も空しく、現実からまた後向きに遠のいてしまうかのような印象。気もそぞろであった。

1. 16. <81回目（=最終回）面接（2月19日）>《約束の午後1時からの面接予定に来室せず。下宿に電話してみると「2時半から来たい」との返事であった。》カゼをひいていると、ひとりではなかなか治りにくい。カゼをこじらせてしまった。昨日からようやく外に出るようになった。家ならば治りが早いと思う。あとわずかか卒業が近づいた。「卒業するのは、さびしいみたいな、名残り惜しいような気持である。」《このあとしばらく沈黙。二度ばかり、落ちつかない視線を窓外に向ける》（「大学1年のショックなこと思い出すの？」）いまでも思い出す。不安な気持は、いまでもある。（「そのことでいまでも窓の外が気になってみている？」）それはない。二人で話していると、緊張を感じる。失礼だが、退屈したりして、窓の外を見ていた。窓の方に座ると、退屈して外をみるようになる。（「引っ越しの手はずは整えた？」）まだ3月はじめにしようと思う。（「卒業式は出る？」）3月はじめ、田舎に帰り、卒業式の当日に出てこようと思う。（「就職楽しみ？」）そうでもない。（「わずかになりましたね」）ハイ。

印象：クライアントは、カゼで休んでいたにしては、目つきや容貌もわりにさっぱりしている。しかし内面の

不安は相変らず漠然と感じている。自分の問題を、これ以上掘り下げる心のゆとりもない感じ。沈黙も比較的長く続く。その間、落ちつかないふうで、うつ向いて目を閉じていたり、窓の外をみたくなくなったりして試みていた。

1. 17. 最終回面接のあとの経過：卒業式の日まで。

2月26日、3月5日ともに来室を予定して待機するが何の連絡もなく欠席する。3月5日、来室がないので下宿に電話したら、「もう引っ越した」とのことであった。

3月7日、本人の郷里へ電話であいさつをする。本人は不在であったが、母親が電話に出る。こちらが本人との関係を申し伝え、礼を述べる。本人は、紹介された病院に投薬をもらいに行っているとのことであった。

3月下旬の卒業式の日、ひょっとしたら挨拶がてら来室があるかもしれないと予想し、心の準備をして待機していたが、2度と現われず、カウンセラーの思いを残したままの訣別である。

以上、面接記録に基づく心理治療過程は、1. 1. から1. 17. までに区分された。

2 「心理治療関係の体験目録」に基づく心理治療過程

カウンセリング過程で行なわれる諸調査は、クライアントを援助するという最大目標のもとでは、必要最小限にとどめるべきである、との筆者の考えから、ここでは初回面接以後、5回毎、ときには10回ごとに実施したものをまとめた。特に、このクライアントのように、強い神経症的不安、疲労感、あるいは焦燥感に悩まされている場合、細心の配慮を必要とした。

結果は、各面接回におけるカウンセラーとクライアントとの、総得点と因子別の得点を、Fig. 2に示した。

初回面接（1970年11月6日）カウンセラー：総得点は102点で、面接初回としては、高い意識体験を示している。また各因子別にみても第I因子（安定さと充実感の因子）、第II因子（積極的な意欲の因子）ともに、それぞれ高い得点を示している。

クライアント：総得点は-19点で、初回面接の意識体験としては、かなり低い状態を示している。第I因子（治療への意欲と充実感の因子）は辛うじて+5点であるが、残りの第II因子（安定さの因子）は-15、第III因子（カウンセラーを知覚する因子）は-9であり、両因子の得点とも負である。クライアントが、このような得点結果を示す例は、これまでの場合、きわめてまれである。

5回目面接（12月4日）カウンセラー：総得点は、124点で、初回面接時よりも、その意識体験はさらに高くなっている。特に第I因子の得点が初回より16点増えている。カウンセラーの面接に対する安定感と充実感の

増加が認められる。

クライアント：総得点は-55点であり、初回面接よりもさらに負の方向の意識体験が高まっている。この回では、第I因子も負の方向になっているのが注目される。

つまり治療への意欲と治療による充実感が、初回よりも低下していることが見られる。

10回目面接（1971年2月5日） カウンセラー：この回の総得点74点で、これまでより下降傾向を示している。

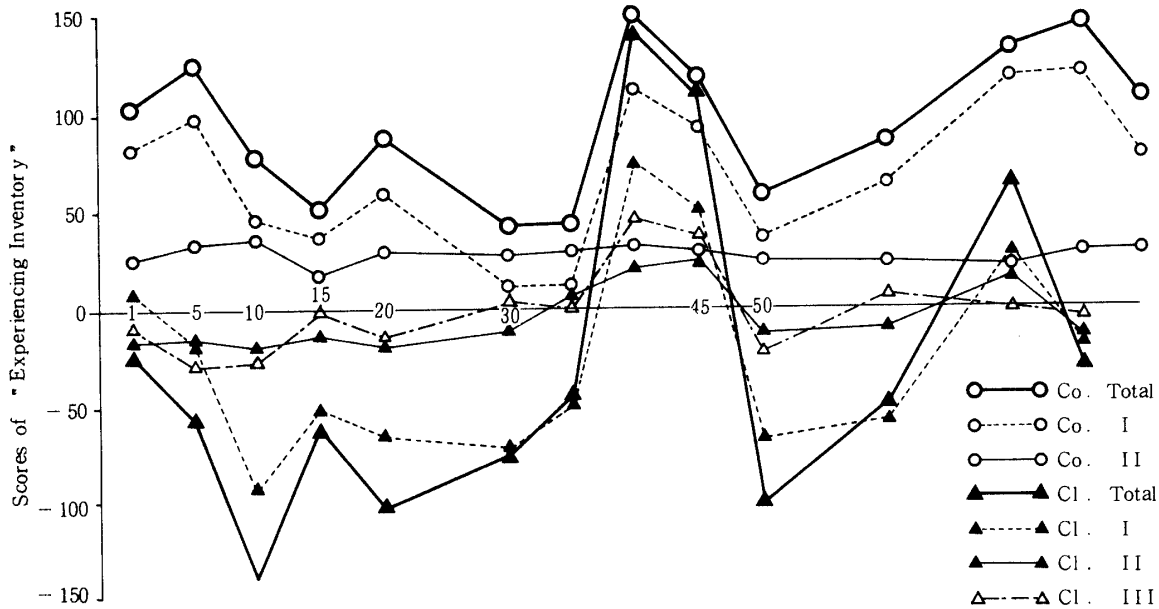


Fig 1 Scores of "Experiencing Inventory" at these interview sessions.

また第I因子の得点も大幅に低下している。

クライアント：この回は、前2回の時の意識体験よりきわめて負の方向に低下し、総得点は-134点になっている。この得点は、本治療過程で実施した「体験目録」の結果のうちで、最低点を示した。面接内容と対応づけられれば、クライアントはこの回に「偏頭痛」を訴え、気分がよくない、授業によくわからないまま出ている。将来どうなるか不安、転科したいなど、現在の心境も最低状態であったことがみられる。安定さの因子が最低である。

カウンセラーとクライアントとの得点のズレも208と きわめて大きい。このようなズレ得点の大きさは、この回における状態が初めてで、従来のケースにはみられなかったことである。

15回目面接（4月23日） カウンセラー：この回は、前回よりもさらに総得点が低下し、55点であった。因子別には、カウンセラーの積極的意欲（第II因子）の得点が、全面接過程で実施したどの「体験目録」のものより低く、20点を示している。

クライアント：総得点は-64点で、意識体験はかなり持ち直している。しかしいぜんとして負の方向での意識体験を示している。注目されるのは、カウンセラーの知覚の因子の得点が-1である。これを、もとの評点でみてみると、クライアントは、ほとんど"0"（どちらでもない）に評定している。カウンセラー知覚を、拒否していることが伺える。

両者のズレは、10回目ほどではなくなってきた。

20回目面接（5月28日） カウンセラー：総得点は88点であり、再び上昇傾向での意識体験を示している。

クライアント：総得点は、再び落ち込み、-97点を示し、10回目の際、おそび後の50回目の際の得点に次いで低下している。クライアントは、好きでもない勉強を無理矢理にして、身体をこわしはしないかという現実不安を覚え、その心的状態がそのまま第I因子、第II因子にあらわれている。カウンセラー知覚の因子（第III因子）も、各評定項目の評定に対し、前半は正・負両方の評点を与え、後半では、0を与えている。知覚することを避けたとしか言いようのない評点の与え方である。

両者のズレは、再び大きくなり、185となっている。

30回目面接（10月21日） カウンセラー：総得点は、36回目に次いで、全治療過程で、一番低くなっている。この頃、クライアントは疲労こんぱいし、来室しても自発的発言をしようせず、カウンセラーに前回の話題を尋ねてしまう。このようなクライアントとの面接での意識体験は、不満足であり、第I因子の得点が16点となり最低を示していることに示されている。

クライアント：総得点は、-76点であり、20回目より上昇傾向を示している。第I因子の得点は、いぜんとして低い。しかしこの回に、クライアントは初めて、カウンセラー知覚の因子の得点で+6点を示した。しかしこれもはじめの3項目（「先生は私と一緒に道を歩んでく

れていると感じる」「先生は私の気持や考えを尊重しているという実感がわく」「お互いに本当の気持を話しあわず、さけているように感じる（－）」に＋2（－は－2）と評点して、残りの42項目には0と評点している。

36回目面接（12月17日） カウンセラー：総得点は42点を示し、全治療過程で実施した「体験目録」の結果で最低を示している。特に第Ⅰ因子の得点がきわめて低く治療での安定さと充実感が少ない。

クライアント：20回目、30回目における総得点よりもさらに上昇傾向を示している。しかしいぜんとして負の方向での評定がみられる。この回で注目されるのは、クライアントの第Ⅱ因子（安定さの因子）が、初めて＋5点となり、正の方向での得点を示したことである。この項目は「どこまで自分は話をすすめることができるか、楽しみであった」「心理相談以外のことは、むしろわずらわしいくらいであった」などである。

カウンセラーとクライアントとのズレ得点も減少してきている。

40回目面接（1972年2月4日） カウンセラー：総得点149点で、全治療過程で最高を示している。また第Ⅰ因子の得点も最高を示している。カウンセラーの安定さと充実感が再び意識体験として高まってきている。

クライアント：総得点で＋142点となり、これまでのどの回より、さらにそれ以後のどの回よりも最高である。さらに注目されるのは、このクライアントの特徴である意識体験の「負」傾向が、一転して「正」傾向に変化していることである。各因子ともしたがって正の評点になっている。面接内容と対応づけると、この回に、クライアントは、これまで抑圧し、抑制してきていた“女性コンプレックス”を、夢④を通じて、意識化し、気持よさとともに不思議さを体験していることがわかる。

カウンセラーもクライアントも両者の意識体験は、きわめて高く、両者のズレもほとんどない。

45回目面接（5月19日） カウンセラー：総得点は＋118点でかなり高い意識体験は維持できている。

クライアント：総得点は＋114点で、全治療過程における二番目の高さを示している。この回でも、40回とともに、クライアントは“女性”問題を話題にしながら、自分の感情を大いに表明できた快感を、カウンセラーとともに体験していることから、その意識体験の高さが首肯できる。

両者のズレも、きわめて少なく、前回同様、ピッタリの体験がなされている。このズレの少なさ、“一体感”は、治療展開の指標になってきているが、次の回になると、再びそのズレが大きくなっていってしまうところにこのクライアントの問題の根深さと重さが伺える。

50回目面接（6月30日） カウンセラー：この回では総得点は再び2ケタ台に落ちる。60点は、カウンセラーの意識体験の得点としては、4番目に低い。クライアントの意識体験の再低下にみられる、カウンセラーの安定さと充実感の少なさにそのことが伺える。

クライアント：総得点は－100点であり、再び負の方向での評定がなされている。評定の仕方の特徴として、91項目から120項目まで、全部“－2”に評定している。この回クライアントは、国家公務員試験など、もともと好きでもない試験を寝坊したり、受けたりして無力感に悩まされていた。自分の性格が、こういう試験事態にあらわれ、自己嫌悪に陥っていた。カウンセラー知覚も、カウンセリングを受けたあとの自己再構成も、“－2”をつけることによって、事務的受動的に処理している。

両者のズレも160であり、きわめて大きくなっている。

60回目面接（12月1日） カウンセラー：総得点は85点で再び上昇傾向を示している。しかし2ケタ得点。

クライアント：総得点は－50点で、前回ほどの落ち込みではないが、いぜんとして負の方向での意識体験を示している。特徴的なのは、前回ほど－2ばかりの評点はみられないが、カウンセラー知覚の項目の62項目から90項目まで全部0を、面接後の充実感（自己再構成感）の91項目から120項目まですべて－2をつけている。今回でも、「体験目録」への取り組みの受動的な姿勢が反映している。

両者のズレは、50回目ほどではないが、135であり大きい開きがみられる。

70回目面接（1973年4月20日） カウンセラー：総得点は、前回（60回目時の評点）よりももっと高くなり、135点を示している。面接における安定さと充実感も高くなっている。

クライアント：総得点は64点である。全心理治療過程で実施した「体験目録」の中で、3つ目、3度目の正の方向での得点上昇を示している。この回に、面接内容として、大学時代の同級女性とバッタリ会うことで、女性というものに好意をもっている自分の気持を表明し、カウンセラーとともに気分の爽快さを経験し、女性というものもつ影響を一緒に考えていることに示される。クライアントは、治療による充実感（第Ⅰ因子）、安定さ（第Ⅱ因子）に特に高い得点を与えている。カウンセラーの知覚についての得点は、60項目から90項目まで、また全部0と評点している。カウンセラー評定への抵抗や受動的態度が伺える。

両者のズレは、40回目、45回目ほどではないが、75とかなり少ない方である。

76回目面接（11月6日） カウンセラー：総得点は、

40回目のときに次いで高く、143点を示している。因子別にみても、第Ⅰ因子、第Ⅱ因子ともに高くなっている。特に第Ⅱ因子（治療への積極的な意欲の因子）は、37点であり、全治療過程のなかで最高点を示している。

クライアント：総得点は、再び負の方向の得点に落ち込み、-29点になっている。各因子ともに負得点、つまり意識体験が否定的なものになっている。特に評定に際しての特徴として、91項目から120項目まで、すべての項目を0段階に評定している。因子の得点が負になるのは、それまでの項目において、マイナス点が多いためである。話題内容との対応づけをすると、この回クライアントは就職先を国公の東京にするか、地公の郷里にするか迷っていたことがわかる。どちらにも決め兼ねているうえに、「体験目録」の評定も、煩わしく感じ、残りの項目をオール0にしている。

カウンセラーとクライアントとの評定のズレもまた大きくなっている。

81回目（最終回）面接（1974年2月19日）
カウンセラー：総得点は113点で、一応3ヶタ得点があり、意識体験は高かった。しかし、治療での安定さや充実感は、かなり低くなっている。

クライアント：76回から数えて、5回目になるので「体験目録」を実施依頼したが、返答なしである。面接の話題内容と対応づけると、「卒業するのは、さびしいみたい、名残り惜しいような気持である」「カゼをひいてもひとりではなかなか治らない」などの表現にみられるように、思いを残しながら、郷里へ帰りたいたいという気もそぞろなことがみられる。その後、来室しなかったことから、下宿を引き払う際に、一緒に荷物の中にまぎれ込ませたか、拒否を示威するためかである。カウンセラーも、敢えて返信することを請求しなかった。

以上、「体験目録」に基づく心理治療過程の結果は、つぎの4つに区分された。初期から中期（36回目面接）にかけてみられるカウンセラーの正の方向での意識体験とクライアントの負の方向での意識体験、および両者のズレの大きい時期。中期40回目面接から45回目面接にみられるカウンセラーとクライアントとの正の方向での高い意識体験と、両者のズレの僅少な状態がある時期。そして中期50回目面接から後期70回目面接にかけて、カウンセラーとクライアントの意識体験が大きいズレから小さいズレに変化していく時期。さらにそれ以後、最終回の面接にかけて、カウンセラーとクライアントとの意識体験が、両者ともに下降傾向をたどり、ズレもまた大きくなり、遂にクライアントは「体験目録」の回答をもしなくなった時期である。

3 フォロー・アップ調査の結果

本人が卒業して、郷里に就職したあと、8カ月後にフォロー・アップ調査を依頼する。1974年11月10日に記入し、返信してくる。

- I. 心配しておられたことのその後のようすはいかがですか。（イ）あてはまると思われるものを○でかこむ。→「③. 同じくらいである」（ロ）またそのことについての近頃の様子。→「死の不安はなら《く》ならない。無為に時を過ごすことに非常にいらだちを感じる。」（ハ）その他、変わったと思われること。→「仕事に慣れないせいか、疲れやすく、気力がない。」
- II. もう一度、相談したいことはありませんか。（イ）前と同じ問題、（ロ）新しい問題。〔白紙〕
- III. 近頃の様子はいかがでしょうか。→「悩みの対象が変わったように思われる。」
- IV. あなたに対して、まわりの人（家の人、職場、近所の人）はどのようにみたり、接したりしていますか。→「わからない」
- V. 相談室のやり方への要望など→〔白紙〕

記述量もきわめて少なく、問われたことのみほんのわずかあるいは白紙であり、クライアントの奥深い苦悩が、これらの白紙状態を通して、こちらに伝わってくる。何も表現できないことが“怨念”の中味である、とかつての治療継続中《面接49回目に表現》のことばを想起させる。

4 「変化認知の評定尺度」の結果

3でのフォロー・アップ調査用紙と同封して、クライアントに依頼した。1974年11月10日に記入。

1. 相談に来談する原因・症状の変化→「B. 変化なし」（2点）
2. 自分自身や行動についての自己理解→「A. かってひどくなやむ」（1点）
3. 人生に対する考え方や気持の変化→「B. 変化なし」（2点）
4. 自分にとって、重要だと考えられることの変化→「C. 少し良い方へ変わった」（3点）、計8点。

また参考までに、カウンセラーも、ほぼ同じ時期に、これまでの面接経過の記録とそこでとらえたクライアント像にもとづいて、評定してみた。

1. 相談に来談する原因・症状の変化→「C. 少し良くなった」（3点）
2. クライアント自身やクライアントの行動の理解→

- 「B. まだクライアントはなやんでいる」(2点)
 3. クライアントの人生に対する考え方や気持の変化
 →「B. 変化なし」(2点)
 4. クライアントにとって重要だと考えられること
 の変化→「C. 少し良い方に変化した」(3点), 計
 10点。

クライアントの自己評定, カウンセラーのクライアント
 評定ともに, 明確な方向への変化はみられず, わずか
 に「重要さ」の変化が「少し良い方」に変化しているの
 にとどまっている。

IV 考 察

ここでは, 以上の結果 1～4にもとづいて, 本
 事例の心理治療過程を, “いま・ここで” どのようにとら
 えているか, またどういうことが問題点として残される
 か。冒頭にかかげた目的に沿って, その結果を総合的に
 考察し, 今後の実践展開への礎石としたい。

1. 心理治療過程について

カウンセリングや心理療法の過程は, クライアントの
 苦痛や訴えをきっかけとして, カウンセラーがともに聴
 くなかで, クライアントの自己解決を促進し, より積極
 的に生き方を探索し, クライアントの独自性や代理不可
 能性を発見していくことを援助することは, いうまでも
 ない。換言すれば, クライアントとカウンセラーがとも
 に聴きあう過程を通じて, クライアントが精神的に健康
 であると感じるような生き方を探索し, その方向へ強く
 生きていくことができるようになることを意味する。そ
 の過程で, カウンセラーはクライアントのかかる自己探
 索を援助していくのである。

本事例の心理治療過程は, 結果 1と 2とに基づい
 て, 大きくⅠ～Ⅳ期に区分した。

第Ⅰ期：初回面接から39回目面接までの時期。「漠然
 とした, しかも長いこと背負い込んだ問題の自己表明と
 自己探索の時期」。この時期は, 足がけ3年の長さにあ
 たり, 一進一退の進行状況を示している。クライアント
 は, その都度背負った現実の苦痛や不安を表明しながら
 “後向き” に自己を焦点づけて探索する時期である。す
 なわち, 自分の生い立ちにもふれながら, 児童期から青
 年期までの生活(主として学校生活), さらに幼少期
 の生活にまでふれながら, 他人に傷つけられ, 差別され
 劣等感に悩まされてきた自分を表明する。特に中学時代
 の同級生(女性)が高校に進学した後に, 急に冷くな
 ったという“失恋体験”をし, さらにそれを基礎としての
 幼少期頃からの女性一般(幼児, 児童・生徒, 大学生の
 女性など)との関係で, 意識の上での強い“被害者意識”

と“敵対意識”を表明する。現実生活における対人行動
 は, 大学内で出くわす女子学生にも, 能動的にできない
 まま, 内心ではいつも“他人を見返えし”“腹いせし”
 カタキ討ちをしていくとの妄執をもちながらも, 何もで
 きずに無力感を感じ, 疲労困ぱいしてしまって悩んでい
 る。このような“女性コンプレックス”は, 夢①～③に
 も象徴されて出現する。しかしどうにも意識化し, 積極
 的な意味づけの覚知にまで到達しきれないでいる。

さらに進路・進学をめぐるっては, 高校を“二流校”に
 さし向けられ, その見返えしのために郷里から“逃げ出
 す”かたちで, 国立大学に進学する。そして意識の上で
 は, 対人関係のわるさから, 大学院か公務員になること
 によって, “怨念”や“恨み”を晴らそうとする。

この時期の自己像としては, “ノイローゼ人間”と自
 ら決めつけ, 性格的に“正義感が強い”“ひがみっばい”
 “他人に嫌われている”と気にし, 自ら孤立感を味わっ
 ている。身体的には“歯並びの悪さ”“歯槽膿漏”にみ
 られる否定的自己像で, 歯並びの悪さのために“笑い”
 も抑制してしまう。この劣等感の裏がえしとして, “知
 的にのみ能力がある”との優越感をたびたび表明する。

自分の設定した目標——大学院や公務員になることを
 達成するために, 綿密な学習計画をたて, 自分を“奴隷”
 に仕立てたり, “検事”となりながら, “被告”を弁護
 する“弁護士”に仕立ててしまったりする。さらにまた
 小説に登場する“悲劇の主人公”に見立ててしまう。

これまで受けた自分の被害, 屈辱の“借金を精算する”
 ため(見返えし)に, 大学に入ったが, 受身的にしか試
 験を受けることしかできない。対人関係で絶えず“傷つ
 けられ”, イライラさせられて, 他人を“好き-嫌い”の
 色分けをしてしかみることができない。女性は厚かまし
 い, 強引だとしか見ることができない。そのような自分
 は自己嫌悪, 自己疎外感を増々強くし, “無力感”に
 陥り, ますます不安を強めてしまう。“デッド・ロック”
 (暗礁)に乗り上げた自分を感じている。面接状況でも
 自らに“打ち込めず”生アクビなどしてしまう。

この時期は, 季節にたとえれば, 呪うべき深い重い雪
 におおわれた, 暗くて長い長い“冬”の旅路を思い起こ
 させる。

第Ⅱ期：40回目面接から45回目面接の時期。「“夢”
 に象徴されるテーマを自ら意識の上で気づく時期」。こ
 れまでの一進一退の治療状況から, 夢④および⑥を表明
 することにより, 自分にかかわる重要な問題である“女
 性”に対する屈辱感, 敵愾心を, 意識の上で気づくこ
 とができるようになる。そしてこれまですさまじい性的エ
 ネルギーを抑圧し, 現実生活の中でも“禁忌”し, 抑制
 している自分に気づく。実際には, 現役で司法官試験に

パスした1年上の女性とのあいだに、夢を通して覚知し心地よさや不思議な感覚を感じることもできるようになる。また女性の前で、これまでのように自己卑下しなくてもよい自分を感じはじめる。“前向き”の自己。

進路面では、近づいた国公試験や司法官試験にも、来年への小手調べと認知し、これまでの寸分スキのない切りつめた学習計画どおりの受験勉強にも、多少の心のゆとりを獲得できる時期である。しかし自己不確か感是否めない。ここで父親の“あいまい”で、漠然とした期待感を寄せられていることに、束縛感、きゅうくつさを表明し、“父—自分（息子）関係”の探索がはじまる。出てくるのは、否定的な“父親像”しかない。家からの仕送りで買った本に“嘆息”を感じる。

この時期は、長い冬の雪どけが始まり、みぞれ混りのなかに“春”の装いを感じさせる時期である。

第Ⅲ期：46回目面接から68回目面接の時期。「メシのために“権力志向”の生活目標を考え、受身的に希望のない前進をする時期」。前段階で達成されたかに見えた女性への屈辱感や敵愾心への気づきは、それ以上発展せず、むしろこの時期は、自分の将来の身の振り方、進路に意識が向いてしまうようになる。将来いかに生きるか具体的には進路の問題をめぐる、基本的不安が頭をもたげてくる。学生生活も、いよいよ最終学年の4年目を迎え、周囲も就職のことで緊迫してくる。そういう状況での近頃の自分を“ふけた感じ”“ひがみっばい”と受けとめている。

つぎつぎに受身的に試験（公務員や大学院）を受験する。やっと受かりかけた公務員二次試験の面接官に「非協調的だ」と指摘されると、「父が非協調的だからだ」と責任転嫁をしてしまう。そして一通りの各試験を、いやいやながら重圧感を感じながら受験するが、吉報はない。“能動的にやれた唯一のこと”として、遂に“留年”を決断する。これには他学生がトコロテン式に卒業してしまったこととは、“逆なこと”をやったという自己満足感がある。しかしこれとて、くやしい、しゃくな感じは否めない。自分は留年してでも、かってからの対人面での見返えしをするために、他人を“管理する側”“権力者の側”につくことしかできない。大学時代は、灰色であり、“春は苦手である”。下宿を転居し、気分一新をはかる。

この時期は、先の見えない“秋”のたそがれ時のイメージを浮べさせる時期である。

第Ⅳ期：69回目面接から81回目面接の時期。「復讐心を秘めながら、故郷に自己退却をする時期」。能動的にやったつむりの唯一のこと《留年》も、その中味は復讐心に根ざしたものであった。いざ留年してみるが、依然

として落ちつかない。“ゾットする”夢⑥をみる。“生首”を下げた‘侍’が自分であり、怨念を晴らし仇討を感じていたのは、自分であることを洞察できないまま、つらい、みじめな自分であり続ける。

“春”を思わせる女性の想起を、1年次に目撃した“シーン”によって行なったり、道ばたで出くわした元同級生の女性と会話をしたりするが、女性を“厚かましい”“打算的である”ということで、切り捨ててしまう。そしてこの方面の関係は、環境が変わらないと見通しがなるともよべる。

卒業後の就職が内定したという“新らしい門出”に際しても、合格したということがかえって目標喪失感を深める。二つの合格先で、東京にするか、郷里にするかで葛藤をもちながら、結局自力で決められず、“ふるさと”の方にしてしまう。そのすがたは、故郷に錦を飾って帰るといふより、“権力志向”のオニになって、敗北の悲哀を感じながら故郷に回帰するという、自己退却である。

自己像は、第Ⅰ期でみられたものと基本的構造はあまり変わらずに、こだわりがある。体力はなく《中学・高校の体育は3か1であった》、身体的容貌も他人と比べて劣等である。“顔”はある角度からのみよいことと、知的能力のよさ以外、何もよいものはない。40歳になれば“総入歯”になるかもしれないという。

郷里では“オフクロ”が待ちかまえている。カゼをひいても治りが早い。“あいまいな態度”をとり続ける“父親”に対する感情の克服ができないままの帰省となる。王様になれず、奴隷として、“権力者—被抑圧者”構造に、メシのため、復讐のため、“ノイローゼ”を克服しきれないまま帰省する。“敗軍の将”として“ふるさと”への退却である。

名残惜しい思いを感じているカウンセラーとも、“別れのとき”を明確に語り合うこともなく、気もそぞろに去っていった。

この時期は、小雪がちらつきはじめ、再び呪わしい“冬”の到来と、そこへの重い足どりでの旅立ちを想起させる時期である。

2. 治療的人格変化について

ここでは上記の結果 3と 4に基づいて、本事例の治療の成果について考察をする。

すでに見てきたように、このクライアントは、足がけ5年の長期にわたる心理療法にもかかわらず、その人格機能や人格構造は、“不安”の克服をなしとげえていないという点で、基本的にはあまり変化していないと考えられる。クライアントは、自己の悩みの原因・症状を「変化なし」とみており、行動の自己理解を「かえってひ

どくなやむ」とみている。また人生に対する考え方・気持に対して「変化なし」とみている。そして自分にとって重要だと考えられることについて、「少し良い方に変った」とみている。この点に関しては、従来の筆者の治療経験例でいえば、最も変化評点が低いということになる。

具体的記述からみても、クライアントは新しい郷里での生活状況のなかで、以前と「同じくらいである」と述べ、その様子に関しては「死の不安はなくなる」「無為に時を過ごすことに非常にいらだちを覚える」「仕事に慣れないせいか、疲れやすく、気力がない」と述べていることから推測できる。また「悩みの対象が変わったように思われる」と述べているように、人格機能や人格構造に基本的変化がみられていないので、状況が変ればそれに応じた悩みがまた生じてくることも、当然理解できるのである。

自らの、これまでの経験と自己構造の不一致の大きさから生じた“不安”の問題の、奥深さと執ようさを感じずにはいられない。クライアントは、自己経験をほとんど拒否し、自己構造を固定化し、それに合わない経験や知覚を意識の上で歪曲してしまっていることが、その基本的変容をもたらしえなかったのである。

自分が自分であるという感覚、幼少時からの発達の途上で直面し、克服してきているはずの諸課題を、その人格構造や機能の中でどのように自己定位できないのであろうか。この点が、本クライアントの治療的人格変化のみられなさに関連がある。このことは、しかし、むしろ治療者の側の“クライアントのとらえ”の問題である。したがって、以下に項目を改めて、考察を加えていくことにする。

3. カウンセラーがとらえたり、とらえきれなかった問題点 — 今後の治療実践のために

筆者は、このクライアントとのとり組みのなかに、筆者自身のカウンセラーとしての長所や短所のすべてが、そのまま現われてしまっている、といま考えている。治療過程のなかでも、それらの点に絶えず気をつけ、配慮や努力はするのであるが、やはり結果的には、以下の諸点が今後の克服課題として残される。

1. 受理面接時でのクライアントの発達の状況の分析の不足

このクライアントが、一枚のごく簡単な「申し込みカード」をもって、カウンセラーの前に突然立ち現われたとき、カウンセラーはその場の異様な雰囲気、“ある恐れ”を感じてしまったのを思い出す。それは手を入れ

ていない伸び放題のザンバラ髪、歯並びの悪さ、赤ら顔、目つき、そして動作などを通じて起こる、こちらの側の“ある恐れ”である。カウンセラーは、それが“人にかみつきそうなイメージ”をもった。そして、面接をはじめてみると、このクライアントの茫漠とした、しかも奥深そうな不安が表明されてきた。このことにも得体の知れない、こちらの側での“ある恐れ”を産んだ。

そして、まず何よりも会って事情を聴こうとして、“簡単な”面接を実施した時、あるいはすでにその最初のこちらのある状況から、カウンセラーはすでに心理テストの実施をしようと考え、「TPI総合性格検査」を選んでしまった。これを実施することで、このクライアントのパーソナリティの異常性が、より顕わにされるであろうとの予測をもった。カウンセラーは、心理テストがこちらの側のつかめなさを、ある程度補うことができるという知識は備えていたのである。

しかし、このように動いてしまうことで、かえってその場にいるクライアントその人の心底からの“苦悩”や“不安”状況を、“ともに聴き合う”という動きから遠ざかってしまったことに気づく。カウンセラーは“簡単な”面接のあと、心理テストを本人に実施している最中に（本人も他人がその場にいることに、きゅうくつさや緊張を感じていたとの判断も手伝って）、他室から、病院の医師（精神科医、学生相談も担当）に、電話で受診の予定をきくという行動結果になった。

いま考えてみると、このこともそんなに「即日」の連絡でなくてもよかったと思われる。

クライアントのその場の様子で、こちらの側での恐れやたじろぎが起りやすいことに気づくのである。もし自分の側の、ある恐れに十分に気づきながら、こちらがもっとじっくりと聴き入ることができたならば、このクライアントの心底からまき起る不安、敵意感、そしてそれに伴う疲労の状況をもともに感じあうということも、より可能であったかと思われる。このようにして努めることによって、このクライアントをして、かくも揺り動かしている不安や敵意の状況が、どのような人格発達基盤《生活史を背景としたパーソナリティの基盤》から起ってきているかについても、ある仮説をこちらの側にももち得たのではなかろうか。実際は、そこまで掘り下げて検討することなく、医師への紹介を先にして、受診をさせることを前提条件にしてしまった。

ここですでに、両者の“治療関係”の質に、ある浅さを生ぜしめることになったと考えられる。多くの治療経験者が苦心し、努めてきているように、“最初の数分間”が、その後の面接の成果を決する”ということに、いま改めて気づくのである。重要なのは、まず目の前のクラ

イェントの“致命的状況”“シンドさ”をともに感じあうこと、ともに聴きあうことであつたのである。

2. 精神科医との協力関係、コミュニケーション

この点がつぎに問題になってくる。筆者は、これまでの経験でも、自分が接したクライエント（多くは学生）は、精神科医の受診とそれにともなう処置が決定され、治療の終結後も、“アフター・ケア”の意味で数回から数10回の面接を行なうことにしている。つまり、たとえ入院し、加療したあとでも、学生の場合、実際の生活までには、それ相応の心理的隔りがつきまとうものである。そこで重要なのは、本人の学業に専念できるようにしたいという希望が、実際に遂行できるように、一緒に聴き合うことである。たいていの事例で、筆者は成果をあげてきている。これらの事例については、後日別にまとめてみたいと考えている。

このクライエントの場合は、精神科M医師の受診のあと、その医師の診断結果報告とその指示を受けて、父兄への連絡をカウンセラーが行なつた。ただ、このとき、当方の役割について、“老練な”M医師とのあいだに、いま一つのつっ込んだ話し合い、つまり当方でのカウンセリングの必要性の有・無を確かめることをしなかつた。というより、このM医師の、これまでの処遇のやり方の“大胆さ”に押し流されてしまつて、こちらの側の考えを主張したり、聴いてもらう努力が足りなかつたように思える。いわばM医師の“押しの強さ”に、こちらの側も押されてしまつた。筆者は、かつてある外国人学生の面接を続行中に、このM医師から精神科医の受診をさせるよう、あとで“注意”をうけたことがあつた。このようなことがあつて、M医師に対する“負い目”となつていたと思う。

この点、筆者が常々考えているように、精神科医とのチーム・ワークがうまくとれていれば、こちらも“遠慮なく”主張できたかもしれない。従来から、カウンセラーのやってきたことが全くか、ほとんど知られていなかったのである。

また本クライエントが通院するようになって、T君の担当は、若手のN医師にうつる。このときになつても、先のこと、併行治療の適・否があいまいなまま、結局、本人の「修学上の問題についての悩みを聴いてほしい」という要望を受け入れてしまうことになる。そのような状況では、精神科医との“張り合い”や“気負い”を、多少生むことになってしまう。

筆者は、本来、カウンセリングや心理治療の原則は、カウンセラーの側でも、クライエントの側でも、“一本にすべし”であるとの考えをもっている。この点は、上

記のことと矛盾するが、やはりクライエントの側の要望のみを、こちらの側にとり込んでしまうという結果を生んでしまうことになつた。

このことは、カウンセラーの中でしっかり明確にされないまま、結果的に“精神科医—クライエント—カウンセラー”の三者関係（別の表現を用いれば、ひとりの恋人をふたりで奪い合つたり、見捨ててしまう“三角関係”）を生むことになつている。そして治療面接の進行中に、この点の不明確さを意識しながら、また他方では“張り合い”や“気負い”を多少感じながら、クライエントをこちらの側に“引きずり込む”ことになつたのではないか。このことは、クライエントの治療的意欲や治療への動機づけも、それだけ分散し、希薄になってしまう危険性をはらむことになつたのである。

このことに気づいて、筆者（カウンセラー）は、少々遅かつたけれど、クライエントとの31回目面接に先立つてY医師（それまで病院では、クライエントはN医師に受診していたが、こちらでの面接2回目からY医師になり、こちらでの面接13回目から「精神分析」を受けている。）に、連絡をとつて併行治療の意義について、協議した。そこで結果1.7.に記したような返答を得た。

しかし、そのように協議しても、医師との“併行治療”には、上記のような疑問が依然として残る。いま思えばどちらかに一本にすべきであつた、カウンセラーはクライエントを“とり込んでしまつたかたち”で治療をすすめてしまつたのではないかと危惧する。

3. カウンセラーの治療過程での“受動性”と“能動性”

概して、この全面接過程での、クライエントとの関係におけるカウンセラーは、“受動性”が支配的であつたと思う。治療関係の中での希薄さは、ここから生じている。

このことに関して、治療過程での記録を読み返してみると、まず応答態度における“表面的なことばでの流れ”に終始しがちであつたところに気がつく。わりに表面的、形式的応答がみられるのは、このためである。ここでも、いつものカウンセラーの欠点が出てしまつている。関係の濃厚さは、クライエントの背後にかくされた（うらみ、つらみ、怨念、見返えし、劣等感—その裏がえしの優越感の感情）を、その場での感情としてとらえながら、クライエントが“正視”しうるような、より“能動的な聴き方”と応答でかわりえていくことから生じていくことに、改めて気づかされる。

カウンセラーの方でも、面接をはじめ、すでに数回目頃から、このことに気づいており、特に23回目面接で

は、カウンセラーとしては相当強く“切り込んだ動き”をしていたことも記録されている。クライアントの側でも、関係の中での「もっと突っ込んだ接し方」の要求を言語化している。このようなとき、場面構成のやり直しの動きをカウンセラーもしている。「ここでどういうことを一緒にやりたいか」をクライアントに伝えたと、クライアントはより赤ら顔になってしまった。カウンセラーは、それまでの面接から、クライアントが面接室以外の対人関係、特に女性を中心とした対人関係、指導教官や郷里の人たちとの対人関係の状況で、文字どおり“弓折れ、矢尽きた”感じになっていることを周知していたが、それだけに、このクライアントのどこにも持っていない“つらさ”をわかりながら、結局、“同情”してしまったと思われる。その場での気づきにも、クライアントをかばう動きにはなっても、クライアント自身がかかる苦境を自力で乗り越えるよう、自己直視しうる援助にならなかった。

いま思うに、改めてカウンセラーの“強さ”や“能動性”の、治療場面に及ぼす意味を考えさせられる。

4. “夢”に象徴されるクライアントの心理内界の状況への解釈力の不足

3に記した点は、クライアントが全く自発的に持ち出した6つの夢に関して、カウンセラーの存在の受動性をさらけ出してしまった。このクライアントの表明した夢ほど、このクライアントの“実存世界のあり様”を、その無意識世界の奥底から投げ出し、カウンセラーに如実に訴えている内容や思想はないであろう。

そして興味のあることに、クライアントが夢を持ち出す回の前の回に、必ずといってよいくらいその契機になることが起ったり、表明されている。たとえば5回目面接の夢①では、前の回である4回目に、三島由起夫の割腹自殺を語り、死の不安をまざまざと表明している。また24回目面接での夢②では、前の23回目の面接で、クライアントの“低迷状態”にしぶれを切らしたカウンセラーが、場面構成をしなおし、クライアントにここで行なう面接の意味を明確にし、強く迫った回に当たっている。このように、“自己直面”をした回には、次の回でクライアントは必ずといってよいくらい“夢”をもち出している。

筆者は、夢のもつ意味についてのそれぞれの学説についての視野は開いているつもりであるが、実際の場面で自発的に表明されたときの、共に理解しながらの深めのまだまだ弱いことを、いま感じている。今後、“夢分析”への視野も開かないといけなく感じている。

幸いなことに、筆者自身も、その後にある契機がある

とき、たいてい興味深いと自分で思える“夢”をみることがある。たとえば、あるカウンセリングで“低迷”しているとき、自分が密かに尊敬するカウンセラーが、ときどき“夢”の中に出てきて、支えてくれるし、励ましてくれる。ときには“やさしくニヤリとして去ってしまう”夢もある。この点、筆者の場合、とても快よい“夢”であるから救われる。

しかし、このクライアントの持ち出した6つの夢は、1つ《夢⑥》を除けば、いずれも“悪夢”で“不快な”夢であり、クライアントにとっても不可解であったものもある。クライアントのまさに実存を根源的に脅かし、クライアントを呑み込み、打ちのめしてしまうほどの強烈な夢だけに、そのことをテーマとした積極的な話し込みは、もっと必要であった。これらの“夢”は、“悪夢”として片づけられない、現身のクライアントの姿をも、そのまま現わしていることを、われわれに教えてくれているのであった。(Boss, 1953 邦訳 1970)。

5. カウンセラーのやれることとやるべきこと

最後に、上記の事例T君の心理治療過程と治療的人格変化の総合的考察のしめくくりとして、“カウンセラー”にやれることとやるべきことを考察して本稿をとじたい。

上記1～4の考察で、気づいてきたことを通して、このクライアントとの長期にわたるとり組みは、しなくてもよかったとは考えない。とり組まなかったら、もっとクライアントは打ちのめされ、破局的事態に至ったかもしれないからである。ただ、できないことは多かったし気づかないことはあった。カウンセラーは、今後の治療実践のなかでの克服課題として、より積極的に明確化できてきている。

このクライアントとの取り組みの過程で、カウンセラーは、思いがけぬ外的な追求の憂き目にあった。“学生相談”が管理-抑圧体制の一機能を果しているのととらえをする一部学生の問題提起である。カウンセラーは、この方との“付き合い”にも、相当のエネルギーを消耗してしまう破目になった。その結果、外的状況に影響をうける“生身”のカウンセラーの“つらい体験”もした。しかし、それでも続けなければならなかったカウンセリングとは、一体何であろうか。カウンセラーは、これらの追求をうけて、後退し、カウンセリングを止めてしまったカウンセラーにも出くわした。ほんとうに残念である。筆者は、逆にこのクライアントに続行を伺がされた経験もしたし、同僚の教官の心理的援助で、救われた体験もした。この点で、これらの人びとに感謝したい。

また同様に、このクライアントとの取り組みの重苦しさを、“ケース・スーパーヴィジョン”に乗せ、カウ

セララーの、より自由な動きに展開できるチャンスは探るべきであった。それによって、もっと効果的にできたと思われる。孤立化していた自分を感じる。

“冬のような暗い呪わしい長旅”に出かけていったクライアントの重い足どりは、いまの筆者の胸の奥にひびいてくる。“長いシンドイ”つきあいであったが、ある意味で、このクライアントは無言のうちに筆者から去ることによって、これらの考察してきた5点を、課題として残してくれているように、いま感じている。

V 要 約

本研究の目的は、治療的人格変化が、カウンセラーとクライアントとの援助的人間関係を通じて、どのように起っていくかをみようとし、あわせて総合的に考察することであった。本研究で分析された事例は、精神科医によって“不安神経症”と診断された一青年男子であった。面接は、約3年半にわたり、延べ81回続けられたが、その後は本人の卒業で中断した。現在地方公務員として勤務している。

結果は以下のとおりであった。

治療過程は、4つの時期に区分された。

1) 第Ⅰ期：初回面接から39回目面接までの時期。「漠然とした、しかも長いこと背負い込んだ問題の自己表明と自己探索の時期」

2) 第Ⅱ期：40回目面接から45回目面接の時期。「“夢”に象徴されるテーマを自ら意識の上で気づく時期」。

3) 第Ⅲ期：46回目面接から68回目面接の時期。「メシのために“権力志向”の生活目標を考え、受身的に希望のない前進をする時期」。

4) 第Ⅳ期：69回目面接から81回目面接（最終回）の

時期。「復讐心を秘めながら、故郷に自己退却をする時期」。

治療的人格変化については、基本的なパーソナリティ機能や構造の変化は、みられなかった。“不安”や“敵意”も十分に克服しきれていなかった。

これらの結果にもとづいて、5点が考察された。

A) 受理面接時でのクライアントの発達の状況の分析

B) 精神科医との協力関係

C) カウンセラーの治療過程での“受動性”と“能動性”

D) “夢”に象徴されるクライアントの心理内界の状況

E) カウンセラーのやれることとやるべきこと

文 献

Boss, M. 1962 *Lebensangst, Schuldgefühle und therapeutische Befreiung*. Verlag Hans Huber : Bern und Stuttgart.

Boss, M. 1953 *Der Traum und seine Auslegung*. Verlag Hans Huber : Bern. (邦訳 メダルト・ボス 三好郁男・笠原嘉・藤縄昭 1970 夢——その現存在分析 みすず書房)

May, R. 1950 *The Meaning of Anxiety*. The Ronald Press Co., : New York. (邦訳 ロロ・メイ 小野泰博訳 1963 不安の人間学 誠信書房)

田畑 治 1967 セラピストの治療的要因の因子分析
臨床心理学研究, 6, 31-36

田畑 治 1968 クライエントの治療的要因の因子分析
臨床心理学研究, 7, 26-33

THE PSYCHOTHERAPEUTIC PROCESS AND THERAPEUTIC PERSONALITY
CHANGE OF AN ADOLESCENT DISTURBED WITH ANXIETY NEUROSIS

Osamu TABATA

The purpose of this study was to analyse how therapeutic personality change occurred through the helping relationships between a counselor and a client. The case reported in this study was a male adolescent client diagnosed as "anxiety neurosis" by a psychiatrist. 81 interviews were continued for more than 3 years and interrupted by his graduation from the university. He is now working as a local official.

The results obtained were as follows:

The process was divided into four stages.

1) Stage I: From the initial interview to the 39th interview. "Self-expression and self-exploration in ambiguous and long-lasting problems."

2) Stage II: From the 40th interview to the 45th interview. "Awareness of the theme symbolized by the "dream"."

3) Stage III: From the 46th interview to the 68th interview. "Leading the life in passive and hopeless style, sloaganing "power-oriented" goal for the purpose of making a living."

4) Stage IV: From the 69th interview to the 81st (the last) interview. "Retreat to his home town, with the mind of triumph over his old enemies."

The outcome of personality change:

5) Basic personality change in function and structure was not seen, because the goal of "the fully-functioning" and the full conquest over his anxiety and hostility was not attained.

The counselor found out the following problems in that process; A) Inadequacy of analysis in the developmental situations of the client at the initial intake, B) Communication with psychiatrists, C) Counselor's "passivity" in the therapeutic process, D) Insufficient understanding of the client's intra-psychic state as symbolized by the dreams.